

人間論



8
93



人
簡
論



人間論序文

人は人として人の間に在り、人を知らざらんと欲するも能はざるなり、然れども眞に人を知ることは聖人と雖も難しとす

湯朝生此ころ人間論を著す、知らず如何様に人を見たる乎

思ふに人間論は、人なる者の價值が湯朝生の目に如何ほどに見積らるゝかを示す者なる可し、然れども湯朝生たる者は知らざる可からず、自個が人を評價するの高下は、やがて自個が人より評價

せらるゝの高下たるを

生にして此理を知らば、人間論を以て自個の價値を世人に問ふは不可無かる可きなり、出版せられたる後は余も一本を得て生の價値を卜せんと欲す、生よ、汝に多少の同情を有する余が如き者をして失望せしむる勿れ

余は未だ生の造詣如何を知らず、又未だ其の稿本を讀まず、今は之より以上を云ふと能はず、

明治三十六年七月

黒岩 周 六

自序

この書題して『人間論』と謂ふ、人間に就きて著者が意見を論ずれば也、そもく人の書を著はすや、人を益し世を利せんが爲めに在らん、また、學者の本分、操觚者の天職とせる者も有らん、また、名聲を博さんとして爲る者も有る可く、報酬を望みて作す人もあるならん、然れども、著者は然らざる也、たゞ著者が嗜好の趣味を享受し、娛樂の快味を感得せんが爲めの故にこの論を草せり、その以外に於て、何等の理由有るに非ず、

それ、絹を織るに機法有り、書を著はすにその法無からざらんや、著者不敏、未だ著作の事を知らず、今人の文を綴り書を作るや、古今の典籍を假り、泰西の先覺を點し、まかも自らは、只組織を分ち順序を立て、多く勞力を用ゐずして、成功せる者の如し、豈、才能の器用に驚かざるを得んや、

著者は幾千の知見を有して、斯る千古の大問題を論ぜんとする乎。況んや、其の生れて今日に至るの間、専ら『遊び』にのみ消光したるに於てをや。焉んぞ、古今の典籍を探り、泰西の先覺を知り得んや。されば、この『人間論』は、著者が今日までの見聞より得たる事實の一部分を摘み、其の得たる處を有りの儘に記述するに過ぎざる也。著者は恐る、大膽寧ろ天下の嗤笑を招かざるかを。

『人間論』一貫の主義は、『人間』の無意味無價值なるとを説き、愉快に著者が近時の胸襟を吐きて、獨斷を恣にせり。而も、誤謬無きとを確信す。『人間論』の旨趣の淺深厚薄に拘らず、『人間』が本性眞價の要義は、是れを『人間論』に盡くす。決してこれ以上に意味の存在を、認識せられ得る者には非ざる也。

著者が懷抱を、猶ほ一層審明に論ぜんと欲したれども、所謂『人間』の世に、は舌を動かすと、筆を遣るとに於てさへも、制裁の面倒、桎梏の邪魔するあ

りて、天分の自由をも自由にしめざる者在つて存す。幽微婉曲の中、謂はんと欲する處を言明するの才筆無き著者は、常に知友に語る談話の主題、寤寐に念頭に浮ぶ感想の描寫を試みしのみ。

『人間論』の稱、或は餘りに過分誇張なるやも知らず、そはその内容の餘りにみすばらしければなり。さはあれど、『人間論』の名、耳に聴こえて善し、又、著者は著作の權利を有すれども、諸君に購讀を強ゆるの權利無く、諸君にも亦この書を購求の義務有る無し。讀むと讀まざると全く諸君の勝手たる也。是かかはあれど、著者としての著者は、出來得る丈け多數の購讀者を得んとを望む。乃ち、『人間論』と謂ふ大なる題を、選び諸君の心機をして、自然に購讀の念を起さしめんと、の策を案ぜり。

諸君は、この論を一瞥して、始終の論旨が、更に取り止め無きに迷惑せん。嗚呼、狂呼、痴歎、この大なる矛盾を爲せるとや。然れども、諸君想へよ、矛盾は

吾人が天性なることを、この書は直ちに其の事實を證明せる者也。

明治三十六年七月二十八日夜

著者

『人間論』第四版に題す

著者



藤村操君の投稿が、思想界活躍の幕を開き、黒岩先生が、『天人論』の書を公にせられてより、論壇忽ち喧轟を極め、沈黙を厭ひ、醉生夢死、久しく昏睡を貪りし我邦人も、實業、宗教、倫理、等の講演説述により、頻々として人生の觀念を聽かされ、學説の示導を聞くに臻れり、かゝる問題研究の餘蘊が、圖らず、拙著『人間論』に多數の購讀者を得、出版者をして忙殺せしむるの觀有り。

『人間論』市に出て日猶淺く、論壇に未だ何等の批評を得ず、生は、他日諸君が、高評指教を與へられんことを希望して措かざる處なり。

生は、自己が著せし『人間論』を見て、多少の氣呵無き能はず、されば、世人の毀譽に接するに先んじて、この文を草し、『人間論』の第四版に題せんとを欣抃する者なり。

1

(二)

『人間論』は、假令、生が一の娛樂として、日常懷抱の思想を撮要し、近時感興の所見を描寫したるに過ぎずとは言へ、生はその全篇を通讀して、往々不快の念に刺激せられたりき、或る部分には重く、或る部分には軽く、運筆の加減に注意を蔑如せしが爲、餘りに始終の統一を缺き、文章蕪雜にして、論旨明晰ならざればなり、然れども、生が謂はんと欲せしその思想は、全部ならずとも、その一部は確に之を論述し得たりと信ず。

生をして、なほより多くの時間となほより多くの精力とを以てせしめば、なほより多く整頓し、なほより多く成功せしめしならん、然れども、三疊敷の部屋に、三尺の机二個を並べ、三人又は五六の青年が、横臥冗談の間に於て、生は獨り案に凭り、しかも暑熱蒸す如きの折、正味十數時間を以て脱稿せしを思へば、生が今日の遺憾も亦斟酌寛宥せざるを得ざる者たる可き歟、加ふるに、生は、與ふ丈け簡單に、たゞ要旨のみ著は

せば足れりと思惟したりしなり。

(三)

『人間論』を發行したる翌日、一葉の「はがき」は飛んで生が机邊に舞ひ來れり、其の發信人は「京橋にて、ユー・アスツル・リ、S.T.生と」有り、而して其の文面の全部を記載せば、乃ち次の如し、

「昨夜、貴著人間論を讀む、妄評左に
本能満足、個人集中は本論の主義也、虚飾、欺偽、偽善の世を罵倒し、偽の學問、偽の文明を誹る處、一世を吞吐するの概あり、されど、奇を衒ふ少壯の客氣のみ、似非天才の言か、醉人の爛語か、何れニイチェの説などを曲解せるの徒、美的生活を稱へしを危險がるも、此等の弊あればか、
黒岩が天人論を著はして、江湖に嘖々の名を得しや、彼をして其名を權にせしむ可からずと、是も人類本性のバニチ、紛として近づく可からざるなり、人生若しくは宇宙

に關する論者續々として出づ、恰かも藤村操の飛瀑に投じて、之に倣ふ似非哲學者の出づると其機を一にす、人間論の如きもの類也、

要するに、此の如き論文は雑誌の片隅にこそ載すべけれ、決して單行本として發刊すべき程のものに非ず、況んや其の説一知半解なるに於て、其文雅氣紛々たるに於て、人間論を論ずべき價値なきをや、吾人はかゝる放言を容るゝ能はざる程、狭量にはあらずれども、かゝる拙論を單行本として世に出せし著者の大膽驚くべし、論題に買ひかぶつて大枚二十八錢を投ぜし予の愚や笑ふべきか、靈的快樂を求むるに資を惜まざる予も、只表題の爲めに二十八錢を失ひしは腹立しさに勝へず、例を引くも忌々しけれど、樗牛の一短文を讀むに百金を投じたる方、餘程氣が利き居る也、人を馬鹿にするに程こそあれ、されど愚痴をこぼすは男子の潔とせざる所、著者の心中陋劣なる、寧ろ

憐むべきか、と、

次に同十八日、「日出國新聞」新刊紹介欄には、次の如く謂へり、

これ宛然一個痛快なる罵倒録なり、宗教を斥け、教育を斥け、倫理道德を斥け、哲學を斥け、科學を斥け、其他凡てを斥け來つて、たゞ一個の我及び戀を最も神聖なるもの、最も尊ぶべきものとして、遠慮會釋なく、縦横無盡に説き去り、説き來たる所、眞に絶大の快文字、絶大の眼り覺しなり、滔々たる天下、偽善これ事とし、罪惡に罪惡を重ねて、人間とはヨシナもので御座いと濟して居る偽道徳家は一度び本書を讀むべし、如何に自己を巧みに寫し出されたるかに一瞥を喫せむ、其果して戀とは著者の感ずるが如く、麗はしきものなるや、自我主義は著者のいふが如く、狂ぐべからざる宇宙の眞理なりやは暫く別問題とするも、吾人は先づ斯くの

如く思ひ切つて、人生の弱點を描き出し、聊か憚る所なく、自己の主張、自己の信念を有の儘に世に公けにせられたる、著者の勇氣と、其度量の絶大に服せざるを得ず、全篇五章、總論、生、社會、戀、死より成る、黒岩派香君の序文簡にして、意を得たり、と、

嗚呼是れ、何たる活潑なる罵倒ぞや、嗚呼、實に何等愉快なる稱讚ぞや、後者も生が長友たる可く、前者も亦生が知己たらざる可からず、生は其の二つながら、筆者の芳名を知らざるを恨むとは雖も、天下に卒先してこの文を惠與せられたるを多謝せざる可からざるなり。
如上の二評の他は、今日まで生の看ることを得ざる處なれども、生は想像す、爾今『人間論』に賜ふ、諸君の高評指教も、またこの二者のいづれか乎、または其の中間に屬する三種に外ならざる可しと。

(四)

生をして再び並に『人間』に就て、感想の二三を語らしめよ、是れ直ちに『人間論』本論の編寫たるのみ。

『人間』何物ぞと問はゞ如何の答を以てす可きや、不思議中の不思議、不可思議中の不可思議、眞箇、千古萬古の大疑問なり、雖中至難の大問題なり、されば、人間の更に『人間』を知らざる所以なるなり、『人間』を知らんとせば、先づ宇宙萬象の理を窮盡せんと、當然の順序たらん、然れども、それはまた不可能事たるを知らざる可からず、蟻は如何に智有りと雖も、毫も人間社會の消息を解し能はざる處たり、吾人が智識は、宇宙の全天地に向ふて、洋々大海の一滴にだも過ぎざる者なるを、かゝる淺蕪なる人智を以てして、絶大無限の宇宙を觀察し、絶大無量の天地を識度し以て自ら安んじ、以て自ら信ずることの正確を以てす、井蛙の管見、其の愚や算る可からず、吾人は、ただ吾人をのみ思ひ、吾人をのみ惟へ、而して吾人の行く處に安んじ、成す處に甘んずるのみ、唯、何物よりも、自己一身を信ずるを以て、人間

が本領と知る可きなり。諸君は、無益の悲觀を艾めて、一たび彼の北州に遊べ、素客去て夜闌なるの頃、連れ彈の新内に耳を傾け、徐に其の一段を談らしめよ、諸君は、此の時に天を忘れ、地を忘れ、自らをも忘る可し、豈人を思ひ、生を想ひ得んや、諸君は、また陶然綠酒を酌み、國色を友として、浩々の氣を吞吐し、よろしく茲に天國を現じ、極樂を觀せよ、人は志尙を謂ひ、高潔を謂ひ、神聖を謂ふ、これたゞ謂ふのみなり、かゝる符兆は、人世に無用の文字と知らば可なり。

(五)

生が『戀』を論じ、『理想の女』を論ぜしを見て、人は『人間論』に適洽せざる者の如く評し、詞友の某は、『人間論』の名を改めて、『助平哲學』とす可しと、生は『戀』を以て、人間の最大目的と信ず、虚偽偽善の夫婦が産める子女は、やがて虚偽偽善の社會を造り、相慕相戀の男女が生める子女は、まさに天真爛漫の社會を形成すればなり、これ生がゆかしき羞恥を呈し、溢るゝ愛嬌を絶たざらんとを願ふ、然れども、こは木の葉の沈み、磐石の浮ぶを欲ふよりも猶ほ困きを如何せん。

(六)

生が『人間論』は、生が獨創なり、生は一冊の書籍を有せず、机上一本の秃筆と、原稿紙のあるのみ、何の餘裕あつてか、參考の書を閱し得んや、若し夫れ、生が所説の古人の言ひし處と一致せる有らば、それは所謂暗合たるなり、生は寧ろ其の一致を望まん。諸君、看よ、日本に如何なる大哲學者の在る乎を、帝國大學の教授たると、文學博士の稱號あるとによりて、かすかに生ける某々あり、時流の際物を當て、糊と剪との著作によりて、やう／＼活ける某々あり、此等の人々は東洋の大哲學者を以て自任せり、嗚呼立派なる大哲學者なるかよ、彼等が口に論ずる處は、昨夜其の書齋に讀みし洋書の一節にはあらざる無きか、彼等が文に綴れる處のものは今朝の洋書の切抜にあらず

『戀』を論述せし所以の理たるなり。生が『理想の女』を説述せしは、女が『人間』を作る大切の器械たればなり、男子が如何に威光を揮ふとも、女子無かりせば、彼れはこゝに出づると能はざりしなり、而して生が『理想の女』を呼號して諸君に説くは、『戀』の『母體』は發育の不完全なる者にして、『家の奴』は發達の優等なる者なればなり。

男子は女子に比較して三文の價値無き者なり、婦人一髪力は十頭の牛の強力よりも強し、嗚呼、造物者は何の惡戯を以て斯々る『魔物』を此に下せしぞ。婦人の尊きは其の羞恥にあり、そが愛嬌にあり、されど彼の婦人に注意せよ、眞人外に出づるを待つて彼等は横臥して、摘喰ひを爲す者なり、しかもこれ等は最も罪の無き部類に屬せり、吾人が稱する『美人』なる者も、眞の『美人』にはあらざるなり、彼れが圓に入りて、無遠慮に稱を欺り擧げて、放尿せるを想ふては、嘔不快に忍び得ざるなり、生は婦人が衣を纏はず、米を食はず、しかも

ば焼直したらざるは無し、東洋の大哲學者も、
鷓と五十歩百歩のみ、善音器と夫れ幾千の運庭
か有る、生は秩序整然たる模倣的大著述よりも、
寧ろ、小なりとも粗なりとも、獨創的議論を聽か
んとを切望し、原造的主張を聞かんとを所望す。
然らずんば、如何なる器に盛られたりとも、古人
の糟粕は永久に陳腐にして、平凡無味、時に嘔吐
を催すの見たればなり。

ざる者なり。

(八月二十五日記す)

(七)

基督の聖書すら、萬人皆是れを信せざるに非
ずや、釋迦の教法さへ、三千年の今は光明を散じ
て湮滅に歸せんとするに非ずや、況んや生が如
き者の一時の囁語をして、真理の凝結たりと思
はゞ、そは大なる誤謬たらざるを得ず。

生が拙著『人間論』も、天下知名の先覺者、黒岩先
生の簡明なる序文と、都下一流の審美家、堀野文
峰氏の崇高なる意匠に成れる装釘とを以て、一
冊の書籍となり、世人の注目を受くるとを得た
り、生は、茲に先生と堀野氏とに感謝せざるを得

人間論目次

第一章 總論……………二頁

第一節 永久に疑問の『人間』

第二節 『天人論』は倫理の書

第三節 『知ると』と『信ずると』

第二章 生……………二五頁

第四節 『原始時代の曖昧、進化向上説の矛盾』

第五節 『人間の』本性眞價

第六節 『趣味』は人間の生命

目次

目次

第三章 社會……………四九頁

第七節 偽善の結合

第八節 所謂破壞

上 教育無用の事實

下 法律無視の實例

第四章 戀……………七五頁

第九節 「戀」は人間の最大目的

第十節 理想の女

第五章 死……………九二頁

第十一節 「死」は人間の最大趣味

第十二節 少年哲學者

第六章 結論……………一〇九頁

以上

附錄

高才辨

目次

人 間 論

湯 朝 半 白 著

第一章 總 論 第一節

永久に疑問の『人間』

『人間』の本性を知らんと欲し、億兆太古の本源に遡り、思念を探查の三昧に凝らすとも、吾人は卒に、無益の徒勞たりしとに覺醒せん。『人間』の眞價を識らんと求め、萬劫未來の潮流に馳せ、想像を自由自在に逞うすとも、遂に吾人は、無用の疲勞たりしとに後悔せん。

『人間』を知らんと欲せば、先づ人間に關係したる宇宙萬象の何物たるやを知解せざる可からず。二十世紀の今、人智漸く開明の域に達し、文物正に粲然の光を放つに到れども、吾人は未だ『人間』を知り得ざる也。『人間』たる吾人にして、『人間』を知らずと謂ふは、吾人は吾人を知らずと謂ふと也。是れ誠に撞着矛盾の如く感ぜらるゝが、決して然るには非ず。人文發明以來數千歳の久しき今日まで幾多の大聖先覺に依りて説明され論議せられたれども、吾人の首肯す可き程の解決には接すると能はざりし也、然り能はざりし也。たゞ夫れ永久に能はざるの問題なるを、知り得たるのみ也。蓋し問題の餘りに大なれば也。

論 問 人

論 問 人

著者は疑ひ惟ふ、乾坤幾回轉、世は三十乃至五六十、百千世紀の後ち、人智絶頂に到達するを得るに及びても、人間は猶ほ且つ『人間』を知解し能はず、吾人の今日と等しく、千古萬古の疑問として提供せらるること無きかを、況んや、人智絶頂に到達することの、空想假説たるに於てをや。

ゲーテ曰く、『知識の増加するに従ひて疑問を増加す』と、茲に於て著者は斷言せん、吾人の所謂『知識』なる者の眞知識に非らざるを。吾人の知識と稱する者は、甚だ價の薄く力の弱き者たるを思はざる可からず。吾人は知識に由りて満足を求め得る者に非ず、理論は永久に疑問を

起し、疑問は永久に理論を弄ぶ。夫れ言舌を絶して、唯だ「了す」に存す。是れ「眞理」に逢着せる也、此に初めて吾人は安んじ得る者也、眞理を捕捉するに吾人は知識を要せざる也、然も過誤有る無し、一度び獲得したる眞理は、古今來に亘りて顛はざるが眞理たれば也。

其の「眞理」とは何ぞや、是れを大聖先覺の説明に顧念せば、吾人は復疑問の人となり、五里霧中に迷惑せん。然れども著者一流の論法を以て斷案を下せば、次の如く謂はん。吾人が天賦の本性を満足するに於て、些も曲ぐる無く、障る無く、天眞爛熳の發展を膨脹伸博せしむるとに於て、縱横無盡、桎梏無く、制限無く、吾人の本能

人 間 論

を興奮せしめ、邁進せしめ得る者、是れを尠くとも吾人は「眞理」と認了する者也。

著者は夙に俗言「我が身て我が身が理解ら無い」に煩悶し、「余は何物ぞや」と、絶えず、自己を知らんと欲して、常に疑問の解決に苦悶せり。其の結果終に近時に及んで漸く先づ「人間」を知り得たりと信ず。著者二十有餘年、起臥遊食の間、この問題解決の資料を得たり。著者は著者一家の眞理と思惟せる處の思想を、人生五六の階級に涉りて鼓吹し主張せり、「人間論」二貫の主義は、源流を茲に發す。永久に疑問の「人間」も、初めて此に、赤裸々の本體を露出せざるを得ず。

人 間 論

第二節

『天人論』は倫理の書

吾人が宇宙の萬象に對して、一度び思慮を周らすの折、何物か夫れ疑問ならざる者あらんや。風に散る一片の枯葉、机上に落つる一點の微塵に至るまで、吾人が思索を遺るに於ては、無限の大問題たらざとせじ。風の吹き來るは何か故ぞや、風に誘はれて木葉の散り、机上に落つる一點の塵の運動せる其の本源を推究するに當つて、何人か其の問題の『無限大』なるに驚かざらんや。

十九世紀に於ける自然科学の進歩は、實に驚心駭目、堅く閉鎖せる宇宙大秘密の戸張を打ち開けりと稱す、然れども未だ其の本尊を観ると能はざりき。皮想平凡の見解に過ぎざりし也、本源を了知せずして支流の清濁に論争逡巡するのみなりし也。飽まで吾人をして説伏せしむる究竟の道理たる可く、餘りに短見淺慮なれば也。人外茫茫、天外漠々、悠悠無量大の天地の實相、遼々無限長の古今の聯關、豈容易く信じ得べけんや。著者頃日、黒岩先生の著『天人論』を讀む。論旨明晰、文章莊嚴。論趣は天人の大問題、主義は宇宙倫理の大説明、實に本邦開闢以來の大著述たる可く信ず。批評嘖々とし

で論壇を喧轟せしむるも亦由有る也。彼の『福翁百話』『一年有半』及び『新社會』等に比する者あるらし、然れどもこは不當の比較ならざる無き乎。著者曾て『好著三品』と謂ふ一文章を作り、前記の三著を歓迎し稱譽し、其の著者を徳として尊敬し、世人の普く購讀せんとを忠告し、また學に志し文を作るの士は、斯る好著に鑑みて、價值無き文字に世を損し、人を害するの愚に惑はず、修養を怠る勿らんとを論じたり。

『天人論』が著者の机上に現はれてより、先の好著三品も顔色無からんとす。『天人論』は一家の私見に非ず、一國一社會の小範域に係りたる論述に非らざる也。一微塵の宇

宙に繋れる刻明整然たる宇宙統一の關係より、無窮大無限長の宇宙實體の極致を説明して、吾人の小自觀と宇宙の大自然と融通同化す可しとなし、心的一元の基礎に立ちて、物心一如を説き、天人合一を論じ、宇宙の實體を演繹して示し、人生の覺悟を歸納して教へ、一の向上主義を以て吾人の歸趣を光闡せり、乃ち一名を『宇宙倫理觀』と謂ふ所以也。萬有理教の旨趣、其の道理に於て間然す可き處無く、吾人の知識を以て、一句一章悉皆首肯せしむ、誰か異議を狭むの餘地を發見し得んや。

さあれ、先生の高論卓説も、是れを精讀し熟考するに於て、吾人は必ずや疑問の問題を發見し得ん、今其の一

例を掲ぐれば、先生は其の第二章第六節に次の如く曰へり、『前略、即ち知る最初の元形質は母の腹より生れたるに非ずして、地球の或る程度まで冷却せし頃、天然自然に生じたるを』と、而して『大極は造化なり』の項に於て、曰く『天然自然とは何ぞや、宇宙總體の物力の關係に非ずや、即ち大極全壹の力に非ずや』と、吾人は最初の元形質を生じたる理由を知らんと欲して、大極全壹の力なるとを知れり、而して又、大極の造化なるとを知れり、然れども、吾人は其の『大極』を信じ得ざる也、『造化』を信じ得ざる也。恰も吾人は、基督の謂ふ天帝を信じ得ざる如く、釋迦の謂ふ佛陀を信じ能はざるが如くに。茲に於て吾人

は元形質の出處に疑惑無き能はざる者也。

疑問に疑問を重ね、結局解答の辭無きに到るは、是れ學術界に於ける常態にして、最初の疑問は永久に疑問として吾人が胸臆を去らざる也、嗚呼、吾人は永久に疑問の兒たる可き乎。

『天人論』は一名を『宇宙倫理觀』と題する如く、全く修身書たる也、倫理の書たる也。最も進歩したる健全なる思想を打つて一丸となし、條理整然、科學的に組織立てたる二十世紀的倫理書たる也。其の物質の本性を説き、宇宙の實體を説き、靈魂の未來を説き、宗教の眞趣を説きたるも、要するに道德の根底を明示して、人生の覺悟を知

第一章 總論 第二節 『天人論』は倫理の書 (二三)

らしめ、人類の歸趣を論ぜんと目的に外無かる可し。夫れ倫理と謂へば、必ず人類社會の幸福進歩に基礎を置かざる可からず。此に於て先生は『天人論』五四頁に曰く、『迷ふと勿れ、吾人々類よ、宇宙の全壺を知りて、其の指示せる所を體奉躬行せよ、之を宇宙と冥合すとは云ふなり、夫れ人の道は宇宙の道なり、宇宙は事實の上に明白に宇宙の大理想、大倫理を啓示せり、單に宇宙と冥合する所に人類の本領は在り、若し此の本領を得ざれば百の科學、百の哲學、百の宗教、百の倫理も人類に何の益ぞ、嗚呼物心一如、宇宙全壺の眞理は廿世紀の曉天が心界の暗に發射したる光明なり、眞個に

萬有を魚貫して神秘を犀照す、此の眞理に導かるゝ者は乾坤を吞吐する大勇氣と、造化に肉薄する大品性を養ふも亦難からじ、吾人心の味き者よ、日出て、三竿猶ほ岡兩を夢むると勿れ」と、是れ人道の宇宙に學ぶ可きを説きたるなり。次に其の七七頁に。天然の同情を説くや、先生が向上的樂天に嘯くの氣概を想見せしむ、曰く、

『故に吾人は深く思はざる可からず、吾人一介の個體は天然全體の同情の繋がる所なるを、吾人は全く天然の向上主義を代表する者なり、吾人の一上一下は彼等の一喜一憂する所ならざる可らず、吾人向上せば彼

等は歡喜せん、吾人墮落せば彼等は慟哭せん、看よ、彼等が黙々として吾人の機嫌にのみ是れ従へるを、吾人饑ゆれば彼等甘んじて吾人の食と爲り吾人病めば來りて藥と爲る、彼等が天然に開ける大パノラマは吾人の觀て且樂むを待てるに非ずや、彼等は天然の繪畫と爲り音樂となり文章と爲り、吾人をして假令ひ人生に異を立て、天下皆敵たるに至るも、唯だ彼等が鼓舞慰藉あるが爲に寂寞の感無きを得せしむ、彼等は吾人の智識の材料なり、吾人の志尙の源泉なり、彼等は彼等の主義の先鋒の爲に兵站を繋ぎて一切の供給を負擔するものなり、思ふて茲に至れば區々人間の毀譽云ふ

に足らず、吾人唯正に生命壹體の向上に盡して全天全地と共に歡喜すべきのみ」と。猶ほ其の他、
 『道德は生命壹體の向上に盡すの外に在らず、向上主義が最上の道德なり、』と、謂ひ、
 『生存競争は生存勉強なり、即ち進化法は萬物として斃れて而て後止むまで勉強せしむるのみ、適者存在の法は、強き者を榮えしむるに非ず、道德ある者を榮えしむるなり、優勝劣敗に非ず、勸善懲惡なり、宇宙が萬物に下す道德的裁判なり、』と、謂ひ、
 『進化法より引出したる智識を道德と云ふ、道德に負くは水泳を知らずして水に入ると同一に危険なり、』と、

謂ひ、

又、其の宗教篇の最後に曰く、

『唯だ常に此神の我と共に在るとを信じて恭謙に、謹慎に、安泰に、歡喜に心を持たせば我の居る所即ち祭壇なり、此神は萬象の上に天啓して曰く仁愛なれ、義務を盡せ、勇健なれ、勉強なれ、眞誠なれ、正しかれと、此神の姿を示す所は心靈の窓なり、深く自ら省みて之に接せよ、』と。

若し夫れ、道德篇、實踐の方面を説述し、『理想我』を以て『現在我』を制し、誘惑に勝つ所以を懇々として説く處に聽けば、先生がこの『天人論』を著作せし眞意の那邊に存す

論 人

るかを窺伺するに足らん。宜なる哉、先生は人類の幸福を増加し、社會の進歩を覺醒せん爲めの故に、この眞摯なる信仰を主張せしなり。さればこそ、勉強主義となり、責任主義となり、努力教訓的となり、義務犠牲的となり、又は有爲艱難の大調和となり、又は仁愛、博愛、向上主義となれるなれ。

然れども思へ、弱き者は少く、食ひ、強健なる者は多量に喰はざる可からざるを。また、冬は綿毛を以て包むとも猶ほ寒く、夏は水に入るも猶ほ堪へられざるを。吾人の認めて『道』と稱する處の者が、夫れ、千古不變の『道』なる可き乎。世人の認めて『法』と稱する處の者が、夫れ、

眞實至誠の「法」たる可き哉。人と時とに由りて相ひ異ならざるを得ざるが、人世萬般の常相也。「天人論」侃諤の垂訓は、萬古不易の眞理なる可き乎、吾人疑ひ無からざる可からず。古來、宗教を説き倫理を教ゆるの士、社會の進歩、人道の幸福を開發すと稱して、立論の基礎を義務仁愛に宗朝せる者の如し。

吾人々類が原始の本性を曲ぐるとに於ては、著者が「眞理」とは一致し能はざる處の者に屬す。後章に到りて之を審にせん。

第三節

『知ると』と『信ずると』

吾人は「知ると」と「信ずると」との區分を明白にせざる可からず。「知ると」は智識の開發にして、智識の進歩するに従て絶えず變化する者也。「信ずると」は才學と智識との能力を期せず、萬人皆共に均一なる者也。「知ると」は薄弱にして「信ずると」は堅實たる也。吾人が今日認めて道理なりとせる處の者も、吾人の智識の變化によりて道理ならずと否定するとも有る可し。今日の「知」は必ずしも明日の「知」

には非ず、「知」は朝變暮化するもの也、是れ薄弱なる所以の理也。「信ずると」は千古萬古に變易有るを許さず、豈知識の増減に依りて朝變暮化する底の間隙を容るさんや。大人物の「信ずると」も、無學の田夫の「信ずると」も更に其間異なる處有ると無し。一度び信ずれば金剛健固となり、確立不動となる所以也。

吾人は「信ずると」の外は信じ能はず、信じ能はざれば只知れるのみ。「知」は永久に「疑」と離る可からざる者なるとを忘る可からず。

吾人は嬰兒たりし時、快く母の懷に抱かれ、甘き乳房に縋りて何等の痛癢を感じざりき、今漸く黃口を脱して

日一日に辛苦を加へ、知見の弘まるに従つて刻一刻に疑問を倍加し來る者也。吾人の安慰は知識の進歩によりて得られざるや明けし。吾人は千古の書を讀破して萬象の道理を知り、臨終の刹那に不安を携へて落ちんよりは、寧ろ無學にして一日眞誠の「安」を得んとを欲する者也。

況んや、吾人は吾人自らを知らざる者也、焉んぞ、身外萬象の理を知り得べけんや。吾人は吾人自らをさへも信じ得ざる者也、何んぞ、宇宙人生の面目を信じ能はんや。

スペンサーは八十有餘年の研鑽刻苦を以て爲るも、尙ほ不可知的に了りて、彼岸には到達し能はざりき。デカ

第一章 總論 第三節 「知る」と「信ずる」と
ルト、スピノサ、ライブニッツ諸氏の合理論と、ペーコ
ン、ロツク、ヒューム等の經驗論とを調和鎔合して歐洲
哲學界の覇權を握りたる絶世の哲學者カントでさへも、
批判論に來りて、遂に不可知に墜ちしを見ずや。

本來吾人自らを知り得ざる程の小智を以て、大宇宙の
眞相と人生の眞趣とを悟了し得べしと信ずるは、大なる
誤謬、大なる迷忘なりと彈訶す可き也。顧へば四千年の
昔より二十世紀の今に到るまで、思想界の千浪萬波は、
無意味の傳播に過ぎざりし也。嗚呼、可笑きかな、人間
の世。

著者が信ずる信仰を、最も簡單に最も明瞭に記述せば、

吾人の嬰兒たりし時、母の懷に抱かれて、一片の快樂と
一點の苦痛とを知らざりし折、欲求せし處の者は、唯一
の「活」のみなりき。即ち、活きざる可からざるもの、夫れ
のみなりき。換言せば、其の時代に最も甘美なりし「乳」を
得んどの、夫れのみなりし也。こゝ即ち、著者が信仰主
張の第一義たる也。

國音の歌

竹林山人作

活ける天地の、
趣 想 へ、
あやにゆかしき、
文 悟 り、
偉功を弘め、
直くせよ、
吾等は絶えぬ、
末ぞ待つ、

第二章 生

第四節

原始時代の曖昧、進化向上説の矛盾

吾人が原始時代は空漠として更に信據す可き確乎たる事實之れ有る無し、されば人類の起原を論議せる科學者間に於ても、甚しき相違有るを免れざる也。其の計算せし所に依れば、近きは十萬年より數百萬年に達し、甚しきは數億年に達するものとなせり。ライエル氏は『プリオ

第二章 生 第四節 原始時代の曖昧、進化向上説の矛盾 (三六)

セン』時期に人間の遺骨の發見せらるべきを先見し、『ホストブリオセン』時期に人間存在の踪跡を追索し得べしと思考せり。ハックスレー氏は人間の存在をば、ライエル氏よりも更に古きものと思考したり、彼は人間の存在を追跡して、既に『テルチャアレー』時期の中間に達したるが如し。ルボツク氏の如きは『ミオセン』時期に人間の存在したるを信じたり。ワレーヌ氏は曰く、十萬年前既に人間のこの地上に生息したるとは確實に肯言するを得、然れども吾人は百萬年前に必ず存在したること無く、若くは存在したる確證無しとの斷言を下すと能はずと。吾人は斯くる學者の説に傾聽して、何時安心の信仰を得可きや、吾人

は止を得ず『不可知的』の疑問に附し去らずんば、徒らに自ら苦を求むるの命識らずとならんのみ。

有名なる佛國の生理學者メシニコッフ教授は、此頃『人性の研究』を著はし、人類今後の進化を假定的に論述せり、其の大意に曰く、人類は猿より進化したる者なるが、今日に在りても尙多くの獸類的性質を有し、肉體の中には不完全なる(將來大に進化す可き機關)尠ならず、先づ不完全なるは眼にして、智齒の如きは殆んど無用の物なり、又腸の如きは頗る大に過ぎ、之が爲に種々の病を起すこと多し、其他諸機關に缺點尠ならずと雖も、人類の發達に最も有害なるは、獸類的慾情の存することなり、此

第二章 生 第四節 原始時代の曖昧、進化向上説の矛盾

等肉體及び精神上の缺點は、科學の進歩と自然の進化とに依りて除去せらる可く、次に人類の進歩を妨ぐるものは疾病、老衰及び死なれども、疾病は微菌學及び病理學の進歩に依りて之を除き得る時の來る可く、老衰は一種の疾病にして種々の原因より網膜の硬質に變ずる爲めに起る者なり、されば疾病と同じく之を避くる法方を見出し得る時有る可し、斯くて人類は百年百五十年の長命を樂しみ得ることとなり、死は極めて愉快に之を迎へらるるに至るべし、と。

右は假定的推想の論述なれば、何等の批評を試みざれど、吾人の最初の獸性を帯びたるとは明かなり。吾人は

如何にして『人間』に發達す可き『理性の原子』を有したるや、吾人の使用せる『言語』の構成には如何の動機を起し、使用し得るに幾何の時間を要したるや。吾人はモーセの説明に疑念を懷き得ざる乎、モーセの説明を矛盾と思惟する無き乎、彼は萬物及び言語を神のインスピレーションに由りて神速に知り得たりとせり、吾人は其の何れに首肯し、何れに否定す可く決す可き乎。

吾人はまた進化向上説を否定する者也。彼の進化向上論者等は何に由りて吾人の進化向上を主張する者なる乎、吾人が猿猴より人類に進化したりとして向上と稱する者乎。進化論者は猿猴より人類に進化したるを語り、又

人猿同祖を説けども、猿猴は永久に猿猴にして、人類は永久に人類たるに非ずや。何故に猿猴は猿猴に止りて其の以上の進化無く、人間は人間に止りて其の以上の向上無きや。同じ元形質を以て造られたる動物が、何故に斯の如く一は有尾動物たるに止まり、一は言語動物たるに到り、他が原始の儘なるに、他は人間と成り得たるや。世は廿世紀と稱し、人は文明と謂へど、其の今日の學說なる者の如きは、たゞ一笑の價値だも無く、吾人をして些の信憑をもなさしめざる者と篤倒せざる可からず。固より人類社會の歴史を看來れば、或る方面に於て進歩の迹を認め得られざるにはあらず、然れども罪惡も亦

同じく進化增長せるとを思はざる可からず、前者を善とすれば後者の惡は之れと共に增長せり。如何に今日の文明を褒賛すとも、罪惡、疾病、過失、災艱の減退無きとを知らずと斷言す可らざる也。吾人が疾病は病院を造り、吾人が犯罪は監獄を起す。病院は年々に繁昌し、刀圭の術歳々に進歩せり、是れ即ち疾病の月々に猖獗し、日々に増加する處にして、人類肉體の墜落せる所以。人間の非進化非向上の證左たらざらんや。監獄學頻りに研究せられ、煉瓦の大館は到る處に柿色階級の勢力を膨脹せり、是れ犯罪の進歩し増大せる故にして、人類精神の墜落せる所以、人間の退化向下

第二章 生 第四節 原始時代の曖昧、進化向上説の矛盾
の證據たらずとせんや。

第五節

『人間』の本性眞價

吾人は『人間』と謂ふ無意味にして、且つ無價値なる動物也、宇宙間に於て最も慾深き動物也、動物の中、一番恐ろしく思慮逞しき動物也。善を粧ひ、美を飾り、以て世を害し他を損するを顧みざる動物也。陰に罪を作りて陽に効を衒ひ、表に微笑を浮べて裏に毒刃を藏む、是れ皆『人間』と謂へる動物の通有性たる也。産むとに歡樂して、去かも、死するを悲泣する動物也、吾人は斯の如き汚

濁なる「人間」たる也。

「人間」自然的本能は、意味無く價值無き慾望の追求、ただ是れのみ。されば、四六時中、喘々として意味無き慾望の追求に狂亂し、晝夜寤寐、汲々として價值無き慾望を充足せしめんが爲に齷齪す。其の慾望とは、不淨の快樂也、陋劣なる満足也。肉的快樂に貪着して、却て天壽の滅別を知らず、名利愛憎に奔走して、反て心意の安樂を顧みず、實に無價值無意味の動物也、吾人は斯る意味無く價值無き動物たる也。

吾人は「人間」と謂ふ奇怪なる動物也、頭の髪の毛の端より足の爪に至るまで、垢を以て包まれ、皮一重剥けば即ち膿

と血とを以て満さる、糞尿と尿液との貯藏器也、不淨悪臭の塊りたるが「人間」と謂へる動物也、蚤是を啖ひ、虱是を吮る。眞に垢穢の動物也、吾人は斯る垢穢動物たる也。「人間」を産みたる人間の男女は、大膽とは謂へ、そが本能の無意味なる慾望の實行を敢て遂げたりき。彼の雄鶏が雌鶏の脊に上りて、而して後ち、容易く卵を産めると均しく、嗚呼、吾人も亦産み落されたりき。褻れたる血の混交によりて、吾人は無意味に産され、臭き糞尿に作られたる米麥に養はれて、吾人は無價值に育てらる。其の全心の慾を以て満され、其の全身の蟻を以て包まれたる、豈、理無しとせんや。人間は正しく褻蟻の動物也、

吾人は斯くる褻戯の動物たる也。

男女一對の快樂逐行の結果に由りて産み落されたる吾人は、餘議無く活きざる可からざるの運命に遇へり。是非も無や、嗚呼是非も無や、茲に産み落されたるが、眞箇、吾人が、運の盡き也。

吾人は母の胎内より産み落されて赤子たるの時、唯一の本能の慾性をのみ有したりき。呱呱啼聲を發して乳を乞ふや其の確證也、夫れたゞこの慾求満足の性のみは、完全に備へられたりき。嗚呼、この本能性が終に吾人をして悲泣せしめ、歡喜せしむる也。

吾人の最も大切なる要件は、たゞ生きるに存す、此

に於て生存競争となり、優勝劣敗となり、弱肉強食となり、英勇崇拜となり來れり。是を以て吾人は平凡なる常識亞流を超越し、世人が認めて道理とせる桎梏を擯斥し、力によりて萬人を左右し、一喝天下を蹂躪する底の偉人たらんとを欲せざる可からざるに到れり。英勇の力は何物よりも偉大なる靈力を有する者たる也、道理は是を自在に曲げらる可く、富貴は一朝にして灰塵と歸せらる可く、宇宙萬象、諸有一切、是れを悉く己のが犠牲たらしめ得ん。嗚呼、吾人は終に力の人たらざる可からざる也。人世名譽と稱する者有り、名譽は兒戲に等しき小人教唆の滑稽具たるのみ。名譽は小人を釣るの餌なり。歴史

第二章 生 第五節 「人間の本性眞假」

に芳名を遺して吾人に幾何の意味の存するや、數千年の昔より吾人が眼前の竹帛に記載せられたる美名と悪名とが、今の吾人には更に何等の痛痒を與へざるにあらずや、況して歴史を看ずに黄土に客たる當人に於てをや。

吾人は大なる宇宙を思ふよりも、猶ほ小なる自己が一小軀を思ふ者也、吾人は全社會の全人類を愛するよりは、尙ほ五尺の一身を愛する者也。人は自己よりも他を思ひ他を愛するを謂ふ、宗教道德を説く者は、此に於て博愛主義を稱へ、献身主義を説けり、吾人は是に反對する者也。吾人は自己擴張の主義を以て、著者が所謂「眞理」と一致爲る者なりと信ずる也。

自己は社會の原動力なり、因子なり、原分子健全ならずして、總體の健全を期するは、御者が馬に滋養を與ふるに努めて、鐵蹄の釘を思はざるが如く、彼のサイクリストがタイヤルの穴を知らずして、空氣の注き込みに汗を流すと一般、其の愚や量る可からざる也。

「人の爲め」と謂ひ、「社會の爲め」と謂ふとが、人類が偽善虚偽の始まりと知らざる可からず。

吾人は誤りたる説教々育の感化によりて、誤りたる心を心とし、誤りたる行を行とし、遂には誤りたる人間とは成り來れり。

孟子は「人の性本善」と謂へり、孟子がこの一言句は、彼

第二章 生 第五節 『人間の本性眞假』
れ自身の本心を正反對に説きし者たる也。吾人に一致したる説明者を見出さば、彼の荀子たる可き乎、愛す可し荀子が言や。彼れは『性悪説』を標榜せり、彼れは虚偽を蓋ふ可く餘りに賢ならざりき、彼れは説明したるに非ず、彼れは彼れ自身の本心を其の有りの儘に述べたるに過ぎず、一點の道理修飾を以て匿し得ざる彼れ自身の心中を吐き出したる也。是れ吾人と一致せる所以の理なる也。餓て美味の食膳に向ふ、是れも亦快樂の一なり、然れども食ふと其の度を守らんは意志の快樂を減じ、喰ふと其の度を過ぐれば卒に疾病を醸すの因となる。人間は絶對に快樂を享受し得られざる者なる乎。

西洋俚言に曰く『正直は殆んど常に貧乏を伴へり』と、嘘言に上手ならば、彼等は決して監獄の門に入り得ざりし也。づらふしかりせば、彼等は決して柿色の股引に鐵鎖の縛る苦痛を知らざりし也。
『朝に道を聞て夕に死すとも可なり』と謂へるは、人の皆心には願へど、口には得謂はざる『夕に美人を抱いて朝に死すとも可なり』の作り替へと知る可し。

第六節

『趣味』は人間の生命

吾人の自己を考ふる時は、其の無意味なると無價値なるとに思ひ到り、終には人生の殺風景なるを感じ、或は厭世となり、或は悲觀に沈み、大なる不平と大なる煩悶とに譴められて、死を思ふに到る者も出づる也。然れども泣く兒の乳房に笑めるが如く、殺風景無意味の人生にも、一の『趣味』なる物有れば、泣くくにも是れが爲に騙され、賺され、紛らされ、不知不識起臥遊食の間、死の

迎へに接し、忽焉として喫驚するが人の常相也。『趣味』有らばこそ吾人は活き得らるれ、『趣味』無くんば半日の生存も辛捧出來得る者に非ず、『趣味』の功も亦偉なる哉。されば『趣味』を解するに及んで、死を嫌ふに到るも人の常相也。吾人は趣味の爲めに活ける也、趣味は吾人の生命と謂ふ所以也。趣味を感受するとは、即ち快樂を満足せしむるとたる也。著者は快樂の満足を希望せるを、趣味に耽ける者なりと曰はんと欲する者たる也。人生趣味を以て始まり、趣味を以て了る。吾人を産むまでに吾人の親は趣味を享受せり、快樂を満足せり、而して吾人も亦是れを繰り返さんと欲する者也、而して彼

等は死と謂ふ無限の趣味を以て逝けり、即ち趣味を以て没る者たる也。

吾人今茲に碁盤に對して黑白を争ふとに樂むの際、會日露開戰の警報に接すと雖も、吾人は是れが爲めに黑白の戰爭を中止せざる可し。吾人はこの時、老父危篤の急報歸省を促がすと雖も、吾人は中途に碁を抛棄し得ざる者也。娛樂に耽り、趣味に憧憬せるの間、心自ら他に變ず可き者に非ず、『親の死目にも會はぬ』と、古人の言ひしは、誠に眞理たる也。親の死に目に會ひ得ざる程、趣味には價值有るとを喝破したる警句たる也。日本に於て、子が父に對する心情を以て、人生最大の義務と心得たり。

論 人

論 人

其の日本に於て、今日よりも眞面目なりし古人が、既にこの句を吐けり、思ひきや、人情古今同一なるとの奇なるとを。人間は社會の一員として自ら率直なる能はず、眞誠正直なる能はず、嘘と偽善と彌縫との爲め、人間赤裸、天真爛漫の眞摯を蓋ふて、常に人を欺瞞し、世を損害する也。

假令百年の壽を保ち得るとも、若し平凡爲す無ければ、百年の人生は零たる也。吾人は寧ろ短命の内、一日の趣味を嘗め、半日の快樂に耽りて死せんのみ。

社會は常識を以て律す可からず、常識は規則的たれと謂ふ也、繩墨的たらしむる也、四角四面のかたくろしき

を謂ふ也。常識は形式に流れ易し、常識は趣味に遠ざかる也。吾人は須らく没常識ならざる可からず、宜しく不規律放縱ならざる可からず、丸く角の取れたるくつろぎたる者ならざる可からず。形式は偽善と成る、趣味は吾人の生命也。世に惑む可き常識宗有り、笑ふ可き常識徒有り、彼等は吾人の敵也、偽善を排し、趣味に趨る吾人の敵也。

頑迷の道德、殺風景なる倫理の偏説に照らして、著者がこの論を駁撃する者も有らん、されどそは其の人の勝手たる可きのみ、著者に於て何かあらん。著者がこの論を爲すは、社會人道の爲めに非ず、豈、曲學阿世の偽善

家を學び得んや。著者は、著者が思ふ處を有の儘に記し、謂はんと欲する處を有りの儘に論ずるのみ。然りと雖も江湖活眼の士、望むらくは、著者が論旨の本義を牽強し、また附會する勿れ。

文豪エマアソンの警語

雄偉なる人物は意見思想の符合に就て毫も頓着せざるなり、
汝が今考ふる所は今正確に之を語れ、明日考ふる所は明日正確
に之を語れ、明日言ふ所が今日言ひし所と撞着するとも何かあ
らむ、然か爲さば汝は他人に誤解せらるゝならん、抑も誤解せ
らるゝはさほど苦しきとなるか、ピタゴラスも誤解されたりき、
ソクラテイスも、イエスも、ルイテルも、コバルニカスも、ガ
リレオも、ニュートンも皆誤解されたり、凡そ此世に顯はれた
る義人大智は悉く誤解されしに非ずや、雄偉ならんと思はゞ決
して世の誤解を恐るゝと勿れ。

第三章 社 會

第七 節

偽善の結合

社會の原子は個々の人間に存す、社會は人類に依りて、
形成せられたる者なり、人類は男女の一對に由りて組織
の因を爲せり、社會の基礎は偽善を以て築かれたる者な
り、そは原子たる男女一對の夫婦が、偽善の本源たれば
也。

女子は眞實に有情なる者にあらず、婦人の一身を男子に献げんとするや、必ず這間に利害の關係無からざる無し。利害の問題が結婚の前、女子の先決問題たる也、利害の問題を解決して而して後、情を發起する者と知らざる可からず。蓋し女子は男子よりも一層烈しき、個人主義者たれば也。項日聽く

有名なる諾威の詩人イブセンが壯年の時のとなりとか、某女子に戀慕して結婚の承諾を求めんと決心せしが、其の女子に會する時には臆する氣味有りて意中を談る能はず、空しく數週日を過ぎたり、其の後或る機會を得て漸く意中を語り出でたるに、女子は明日の午後妾が家に來

論 四 人

られよ、其時に確答すべしと謂へり、イブセンは千秋の思ひにて待ちたる翌日に及び、定め時刻に女子の許に行き直ちに座敷に案内せられしも、女子は久しく出で來らず、待つと凡そ二時間計りとなりたり、イブセンは馬鹿にせられたるならんと思ひ、烈火の如く怒りて今や立ち去らんとする際、彼の女子は出で來りて、妾は情人の忍耐力を驗せんとしたるなりと謂ひ、終に結婚を承諾したり、之れ即ち今のイブセン夫人のとなりと。

是れ何等面白き消息ならずや、この一片の消息が、吾人の所謂人間夫婦の内容を解剖し盡したる者也。イブセンが戀に病みしとは、吾人の同人に祝賀する所也、人間

の本我を發揮し得たれば也。其のイブセン夫人が、明日
 妾が家に來られよとは、即ち是れ利害の問題を解決せん
 爲の外有る可からず。果然、彼の女は然りし也。將來良
 人たる可き人の氣質を試みぬ、其の忍耐力を驗めしたり
 き、其の一舉手一投足を熟視せしのみならず、眼附き、
 鼻筋、口元を凝視したるや勿論也。彼の女は思ひけん、
 是れ程の惚れ込みならば、よも見棄てはせまじ、是れ程
 の辛捧力を有せば、正可喰ひ損ひはせざる可し、容子も
 また妾が氣に入りたればとて、終に結婚するに到りし也。
 世界に赫々の才名を轟かせしイブセンが、能く人間の本
 能と婦人の本領とを發露せり、但し是れ豈イブセンが夫

人一人のみ然らんや。天下の女子は皆悉く然るなり。表
 面に現はし得ざれども、心中にはイブセン夫人と一致せ
 ざるを得ざる也。己が身に夫定めの評議を隣室に聽きし
 折、女子は先づ耳朶に紅を潮す可く、次に心臓の鼓動を
 高める可く、次に何となく嬉いやうの、さて耻かしいや
 うの氣持ちのする可く、次に其の良人たる可き人の容子
 の見たかる可く、最後には、良人たる可き人の煩はしき
 關係者の多きや尠なかる可きか、又其の氣量也、資格也、
 位置也、肩書也、そして財産也、そしてまた其の容貌也、
 斯くる條々の聞き度き切情や譬へんに物無からん。産み
 し兩親が最愛の娘の爲めに骨を折れるのなれども、猶ほ

第三章 社會 第七節 偽善の結合
 安心は出來ざる者なり。是れ眞に「人間」が、自己中心主義たる事實の證明たる無からんや。

古は希臘の一政治家、言を成して曰く「希臘は世界を左右し、雅典は希臘を支配す、次に雅典を統治するものは予なり、而して予は妻子に左右せらる、されば予の妻子は世界を掌握す」と、是れ女子が憎る可き魔力の威光を稱嘆する者歟。されば、カントは婚せざりし、ロツクは娶らざりき、ショーベンハウエルも、ライプニッツも其の生を果てるまでこの魔力者と結ばざりき、そは累の繁げきが故乎、吾人これを知らざる也。
 人は信用を謂へとも、人間の社會に信用なる者の存在

する者にはあらず。西洋の諺に曰く「信任は往々忠義心を起さしむ」と、是れ至言にあらずや。吾人は天性に於て忠義心を有する者には非ず、世には、善人と見ゆる者あり、悪人と見ゆる者もあれど、そはたゞ見ゆるのみ也。善人必ずしも、眞誠の善人にあらず、悪人必ずしも本統の悪人に非ず。人間は、元始の時に享受せし其の儘の性質を蓋ひ得れども、消滅變化し能ふ者に非ず、永久に易らざる者也。雀は百歳まで跳りを忘れざる也。
 善人と見ゆるは、人間の本我を發揮し得ざる不幸の小人物たる也、悪人と見ゆるは人間の天性を現はして稍下手なる奴なり。所謂善人は尠なくとも、偽善種の混血子た

らざる可からず、所謂悪人は少なくとも正直の分子を加味せる者たらざる可からず。吾人の所謂犬人物とは、ほんやりとしたる、とりとめのなき、人の見て、不得要領なりと観ずる底の者たらざる可からず。

人類は天性に於て忠義心を有せず、換言せば信用なる者を有する者には非ずと謂ふ也。然るに之れ有るが如くに見せしむる者は、見せしめ得る他の信任の有れば也。この他方よりの信任無くば彼れの忠義心は不忠義心となり、不信用となる者也。若し夫れ其の信任なる者も利害關係の策略に出づるとを知らば、思ひ、央ば、に過ぎん也。俚諺に曰く『賣り言葉に買ひ言葉』と、是れ双方が利害得失

論 問 人

の打算より出ずる意志の作用にして、人間が本性は些細なる斯る言語にも現はれる也。『夫能く働く時は、妻も亦能く働く』と謂へるも、此處の理を説明せる者也。さればジョンソン曰く『褒美を與へざる時は、有徳の者寡し』と、人間のみずほらしき、淺墓なる性情を發き得て妙と謂ふ可し。

人間はどくくまでも美表醜裏の可厭な動物たる也。如何に美装を纏ひ、如何に四角四面に威嚴を作るとも、それは皆空意張りたるを如何せん。其の夜半人静まりて後、焰々勃起せる動物的本能の陋態是れ狂ふを想ふては、何人か夫れ眞誠の威嚴を保ち得んや。吾人の人に接するや、

論 問 人

必ずまづこの觀念を先にす、されば何人と雖も、吾人が見て以て偉大と感じ、威光有りと覺ゆる者の無き也。

人間の社會は、斯くる原子の集合也、斯くる分子の結合也。嗚呼、面白やな、人間の社界。

人間は、つくるはざるに眞實の價値の輝き、飾らざるに眞誠の價値有る者と知らざる可からず、天真爛漫、公明正大が吾人の本領たる也。

第八節

所謂破壊

著者は茲に大膽なる破壊の辨を記せざる可からざる也、現下の社會を瞥見して、破壊の辨を爲さんと欲する者、豈著者一八のみならんや。著者は健設的理想を抱懷せるが故に破壊の辨を弄するに非ず、今は健設を思ふの閑無き也、たゞ一撃大破壊を試み、大洪水大暴風の後、光風霽月に浴するの觀あらしめば可なるのみ。

著者は宗教及び道德倫理なる者が、著者の所謂「眞理」に

一致契合せざる者なることを確信し記述せり、今この社會篇に於て辯ぜんとする所は何物ぞ。

上、教育無用の事實

とす。論より證據の天下に匿れ無き明白の事實は、去る二月發行の『ナインチーンズ、センチュリー』雜誌に掲げたる。エルツバツヘルの論文最も趣味深し、即ち拔載せばハヅリット曰く『非常なる學者は往々非常に少量なる人なり』と、教育は人間の天性を曲ぐる者たる也、吾人の膨脹を抑壓する者也。偉人となり大人物とならんには必ずしも教育の必要は認めらる可き者に非らず、殆んど總て

人 間 論

人 間 論

の人類活動の舞臺に於て最も秀でたる人は規則的に繩墨的に世人の認めて云ふ所謂正則の教育を受けたる人には非ずして獨學の人なり。先づ英國の政治家に就きて其例を擧ぐれば、クロムウエル氏は農夫なりき。クライヴ及びヘスチングスは手代なりき。ゴツシエン卿は商業家。クロマー卿は軍人なりき。又他國に於ても之と同じく、比斯馬克公は法律を學び、二回まで試験に落第して田舎の地主とり、何等の經驗を有せずして外交官となり、終に内閣に入りて獨逸帝國を建立せり。華盛頓は測量手。ベンジャミン、フランクリンは印刷業者。エブラハム、リシコルンは樵夫。ウイッテは鐵道會社の役人なりき。少

しく下りたる方面に於ても、ハーシエルは樂手。フアラ
 デイは製本屋。スコットは辯護士の書生。ムラーは神學
 生。ネイは公證人の雇人。紡績器械の發明者なるアーク
 ライトは理髮師。アームストロング卿は辯護士。ハーバ
 ート、スペンサーは工業技師。バスツールは藥種屋。エ
 チソンは新聞賣。ジョージ、ステプエンソン及び當時の
 多くの大發明家は孰れも職工なりき。實に人類活動の舞
 臺に於て卓越したる人は、皆に専門の教育を受けざるの
 みならず、普通教育すら之を受けざるもの多く。政治家
 にても實業家にても成功せる人は、多く獨學の人なり。
 エブラハム、リンコルンは學校に於て僅かに讀書作文算

論 問 人

論 問 人

術を然も極めて不完全に學びたるのみ。大統領ガリーフイ
 ールドは十歳の時船夫として働けり。大統領ジャックソ
 ンは馬具師にして生涯完全に綴字を爲す能はざりき。大
 統領ハリソンは農夫として其生涯を始めたなり。大統領ジ
 ヨンソンは裁縫師より身を起し、曾て學校に入りたるこ
 となく、妻に就きて讀書を學びたり。ビーボデーは十一
 歳の時より、カーネギーは十二歳の時より、實業に従
 事し。シュアツプは御者なりき。鐵道王ヴァンダービ
 ルトは渡船の船夫なりき。ロスチャイルドは行商人。ク
 ルツプは鍛冶工。ロックフェルラーは手代なりき、此の
 如く巨多の例證を示したらんには、學者自身にも過算せ

いられたる教育の價値を疑ふに至る可し。

智識は金錢の如し、金錢其物は何等の價値なしと雖も、其金錢の購買力に於て價値を有するなり。智識は銳利なる双物の如し、然も其用法を知らざる人には双物の効力なし。支那人は歐洲人よりも以前に磁鐵を知り、火藥を知りたり。然れども歐洲人に依りて始めて其の用を爲したり。那破翁が如何にしてアウステルリッツに勝利を得たるか、フレデリツキ大王が何故にホッホキルヒに破れたるか、此等の事に明なる軍人と雖も、戰術に於ては淺學なる士官に劣ることもあるなり。要するに、學者の功用は應用の如何にあり。而して學者間及び學校に於ける

論 問 人

論 問 人

弊は、新思想を容易に入るゝ能はざるとにあり。此弊はソクラテス時代より存するものにして、ガリレオの如き、コルムバスの如き、又其の他の多くの發見者の如きは、罪人として待遇せられたることすらあり。何故に然るかと云ふに、此等の發見は從來學者の保持せる條理を破壊して他の學者の價値を失はしむる爲なり。此故に學者及び學校は常に新思想を排斥するを好み、ニユートンも、ダーウインも嘲笑を免かれざりしなり。カントと雖も十五個年間講義を爲したる後、四十六歳にして始めて教授となることを得たるなり。シヨツペンハウエルは大學の嫉妬の爲に終に教授たる能はざりき。ストラウス及びレ

論 人

ナンの如きは之が爲に大學を去るに至れり。ピートーヴ
エン及びワグネルは狂人と目せられたることあり。ミレ
ーはサロンに於て冷遇せられたり。而してエジソン、マ
ルコニ、レイントゲン、ユツホの發明は皆今の學者の爲
し能はざりし所なり。余は信ず、教育は個人的なるを可
とし、學校は實際的なる人をして監理せしめ、所謂今日
の教育家なるものは大に之を排斥せざるべからず。然ら
ざれば、教育に依りて利益を得ること難く、却て教育は
無益視せらるべしと、

著者が謂はんと欲する其の過半は、如上の文字に由り
て、明晰に是れを説明せられ得たりと信ず。

論 人

今日我國の學風を看れば、學問の惡趨勢到る處に跋扈
し、頑迷殆んど度し難き者有つて存す。而も彼等將して
能く何事をか成し得たる、可慙寧ろ嗤笑に堪へざる者な
り。

學問は應用進歩に依りて初めて効を奏す、我邦の學風
は器械的也、商品賣買的也、本箱的也、字引的也、肩書
きを得んが爲なり、役人に成らんが爲めなり、權勢家の
娘を娶らんが爲なり、富豪の養子に貰ふて貰はんが爲な
り、豈、斯道應用進歩の効を所望し得んや。

教育は個人的に依りて其の目的を達し得るもの也、人
類の進歩は、個人が天賦の頭腦に先天的に備はれる者た

れば也。

偉人と謂ひ凡俗と謂ふも、所謂教育に由りて別るゝにはあらざる也、帝國大學卒業したる學士達の、何故に正規の教育を卒へざる獨學者に一籌を遜れるや、角帽の威勢今や地を拂ふて消ゆ、實に事實は理外の理を産み來り、吾人の所説を重からしむ。

吾人は壯年にして偉人となりし者も、小にして愚鈍たりし者も、皆其の天分なりと斷ぜんと欲する者也。看よ、ナポレオンもウエルリングトンも共に幼時に在りては俊秀の少年に非らざりき。クライブ卿は小學校時代に望み無き愚物として常に友人より輕侮せられたり。グラント

論 人

論 人

將軍及びジャックソンも共に教師より魯鈍なる少年として他の生徒を戒むる例に用ひられたり。スコットは遊戯に長じたれども、學業には非常に懶惰なりき。シエリダも學業の成績常に不良にして、母は家名を汚す愚人なりと嘆じ居たり。ゴールドスミスがダブリン大學の入りて學試験に及第したるは、友人間に不思議に想はれたる程にして大學を卒業する時は辛うじて末席を占めたるなり。有名なる美術家ウイルキー及びヒエトロ、チ、カルトナは共に學友に愚弄せらるゝを常としたり。ニユートンも學校時代には終りより二番目に席を占めて僅に、落第を免れ居たりと云ふに非らずや。されど又少壯にして聲名

を成したる偉人を尋ねんに、

ピットは二十二歳にして内閣に列し、二十三歳にして總理大臣となり。グラッドストーンは二十二歳にして國會議員に選ばれ、二十四歳にして大藏大臣となり。ワシントンは二十二歳にして既に有名なる陸軍佐官となり。ピイルは二十一歳にして國會議員に擧げられ。ナポレオンは二十五歳にして將軍となりぬ。義経は十九歳にして兵を擧げ、爲朝は二十四歳にして九州を鎮定しつ。近くは明治の初年にすら、歳二十代の大臣もありき。

二三の新聞雜誌より拔書せし、この事實を看る者、吾人が教育無用の辯の、強ち奇を銜ふの言と、思はざる可

論 問 人

き乎。次に

下、法律無視の實例

は如何、法律の愚なることは皆人の知る所也。去日ドイッチェ、ユーリスチエン、ツァイツング(獨逸法律新聞)に依りて次の滑稽なる報道を爲せり、曰く、數年前伯林に住める一婦人にして、行衛不明となりたるものあり、定期を過ぎて歸らざるより、市役所は死亡者の名簿に登記したるが、三年を経て其婦人は再び歸り來り、旅行券其他法律上身元の證明を要する書類の下附を其筋に要求したり、然るに當局者は已に死亡者名簿に登録したるもの

論 問 人

なりとて書類の下附を拒みたり、依りて婦人は此事を裁判所に訴へたるに、裁判所にては告訴の期限を經過したる事項なりとして、告訴を受附けず之を却下したりと云ふ。

嗚呼、何等滑稽至極の記事なる乎よ、吾人は、面倒なる道德の倫常に制壓せらる、煩はしい哉人間や。法律の桎梏を受けて愛國を強いらる、厭さいかな人間や。活きて夫れ五十年、權利を噉咄し、義務を嘯々す、また馬鹿らしからずや。何物の痴漢ぞ、斯くる兒戯に等しき繩墨を作る。ベーコン謂はずや、「人の作りし法律は蜘蛛の網の如し、小者は之に捕はれ、大者は之を破る」と、至言と

論 閻 人

論 閻 人

云ふ可し。眞率正直なる小人は、常に法律の網に掛り。強情強慢なる不正直者は、罪をなすも社會は見逃がして咎めざる也。

世に自ら好んで罪を犯し、自ら求めて法律に觸るゝ者有らんや。犯罪の源を正し見よ、罪惡の因を尋ね看よ、そは社會の罪に座せん、人類本然の天性を夫れ如何せん。

世の中は、金と女が、敵なり、
どうぞかたきに、めぐり遇ひたい、

(蜀山人)

来て見れば、聞くより低し、富士の山、
釋迦や孔子も、かくやあらなん、

(村田清風)

浪の音、さくがいやさに、山奥住ひ、
またもうるさい、松の聲、

(俳諧)

論 問 人

第四章 戀

第九節

『戀』は人間の最大目的

『戀』は人類が先天に供有せる天賦の本能なれども、絶えず是れを發動興奮せしめ得る者には非ず。微妙の動機、胸中の琴線に觸るゝや、其の刹那に起る一種の感應を謂ふ也。

『戀』は虚偽にあらず、偽善に非ず、人類自然の本能の發

論 問 人

展作用より起る一種玄微の情慾にして、是れを抑止せんと欲して得ず、また起さんと欲して起し得らる可きものに非ず。陰陽の電氣が相合して發熱し發火する如く、男女の對向に於て、不可思議の觸接の瞬間に、心頭に浮び來る感情々念の慾望を『戀』とは謂ふ也。

基督は『愛』を以て耶蘇教立宗の基礎と爲せり、古來の宗教道德に於て、未だ曾て諄々『愛』を教へざる者無し、然れども未だ曾て懇々『戀』を説きしことを知らず。吾人いたく怪訝に堪へざる所也。

『愛』は人類處世の一方、便たる也、『愛』は吾人が本眞の中心より出づる者にあらず。『愛』は偽善心の裝飾品也、『愛』は人

論 問 人

人

類百方面に及ぼし得るの情想たるのみならず、山川草木、禽獸蟲魚に至るまでも、是に愛を向け得る也、そは、容易に浮ぶ情想なれば也、しかも更に何等の苦辛、苦痛も無く、手間も入らざるなり。

『戀』は人類各自に供有せる天賦の本能なりとは雖も、是れを知り是れを味ふとに於ては、甚だ至艱の事に屬す。

『戀』は容易に得られざる一大事件たる也。さればこそ、『人間の最大目的』と謂ふ所以也。

人は能く『戀』を病むと謂ふ、然れども『戀』に惱み得る者は誠に稀有の事たるなり。吾人が『戀』を知りし時は、千歳の一遇と觀じ、天に舞ひ地に踊らざる可からず。『戀』を病み

論 問 人

し者。は。人。類。最。大。の。價。値。を。享。受。せ。し。者。に。し。て。幸。福。是。に。及。ぶ。者。ま。た。と。有。り。得。可。き。者。に。あ。ら。ざ。れ。ば。な。り。さ。れ。ば。『戀』は。睦。じ。き。夫。婦。間。に。於。て。も。其。味。ひ。を。知。ら。ざ。る。者。甚。だ。尠。な。か。ら。ざ。る。可。く。山。川。萬。里。を。隔。て。た。る。間。に。於。て。も。能。く。寒。の。『戀』を。味。ふ。者。も。有。る。可。き。也。

『プラトンは我良友なり、アリストウトルは我良友なり、眞理は我本尊なり』てふ古諺を改めて『プラトンは我良友なり、アリストウトルは我良友なり、富貴は我本尊なり』とは米國人の謂はんと欲する所たる可く。吾人はまた更に次の如く日はんと欲す『プラトンは我良友なり、アリストウトルは我良友なり、』『戀』は我本尊なり』と。

吾人は既に『愛』の偽善と『戀』の神聖なると、に就きて、其の概要を記述したりと信ず。吾人は次に『戀』と『色』とに就きて些か謂はんと欲す。『戀』は『色』の第一歩也、『戀』の成功は卒に温かき『色』を産む、『戀』は無形也、『色』は實行也、『戀』は男女相互の意志の融通也、以心傳心也、『色』は男女一對の抱合也、異體合一也。然れども記せよ、『戀』必ずしも『色』の結果を得るものにあらず、『色』必ずしも『戀』の第一歩を通過せし者に非ず。

古來謂ふ、『英勇色を好む』と、眞に然り。蓋世の大英雄と歌はるゝ彼のシイザルを見よ、『色』の前には平伏せんとせしにはあらずや。彼が勇ましくルビコン河を渡りて、

大ボンベイを打ち滅ぼし、意氣揚々としてエジプトの地に到りし折、エジプトの女王クレオパトラは巧みに彼を籠絡せしにあらざや。クレオパトラは何か珍らしき趣向を策してシイザルを愕然せしめんとせり、而して襪履屑の籠を贈らせり、シイザル是を見て果して狼狽したりしが、終に其の籠を開かせしに、豈計らんや、籠の中より現はれたるは天姿無双の美人——クレオパトラ彼れ自身なりき。嗚呼、三軍叱咤の炮烟中に於ては、天下無敵のシイザルも、こゝに脆くもこの美人に兜を脱ぎ、終にはシイザリアンと謂ふ子まで産ませりと謂ふ。英勇眞に色を好む者たる也、されど彼れが『戀』に悩み、『戀』の眞味を嘗め

論 問 人

しや否やは正に疑問に屬す。
吾人はこゝに繰り返へして曰はん、『愛』は理性的也、『戀』は感情的也。『愛』には利害の關係を思ひ、『戀』には無我夢中と成る。

著者はこゝに千古の絶句を書して、この篇の終とせん
『か、山を抜く、項羽でさへも、虞子の涙に袖しぼる』

論 問 人

第十節

理想の女

著者は深く女子を愛し、厚く女子を敬す。而して、著者が最も眞面目に、女子に希望する處のものは、其の容色なり、それが天姿也。美目秀眉、郁たる花の如く。窈窕阿嬌、熒たる月の如く。即ち、美人たる事、唯、是れ耳。是れより外、著者は女子に多くを囑望する事の非理たらんとを信ずる者也。女皇エリザベス曰く、『奇麗なる顔は最も好き紹介状なり。』と、世人は女子に訓へて曰く、花

の艶たらんよりは、松の操を守れよ。と、誤れるの甚しき哉。人面獸心は吾等の共有性とは知らずや。いづくんぞ知らん、外面如菩薩にして、内心の如夜叉が、必しも美人のみの特性たらんとは。

二女有り、共に淑女にして、一は美貌、一は醜面なりとせよ。吾等は必ず、其の美貌者を愛し、美貌者を敬せん。是れ自然の情也、是れ本然の理に順ずるもの也。其の醜面なる者に向つては、吾等は寧ろ、哀愍の情を垂れん也。哀愍は愛敬と其の位置を異にす。

Ugly faces and noble hearts often go together. と、謂へるは、皆是れ、美人に蹂躪せられて、其の寄る處を失ひ、所謂、

反動的の現象を以て、漸く其の愛を繋ぎ、餽口を求めんとする術策に過ぎず。斯くる、ノーブル、ハートは、自然に背くもの也。ナチュラルならざるや明々白々也。若し夫れ、美人の心情、醜婦のそれに劣れりとし、曲れりとしで、美人を懼る可しとせば、天下の美人を擧げて以て、悉く醜婦に化せざる可からず、豈、得べけんや。

彼の佛者が佛陀を讚嘆するに、光顔巍々と謂ひ、三十二相を説き八十隨形好を稱するに照らしても、如何に清淨の姿色、愛嬌の美容が、神にまで、より近かきかを知るに足らん。されば、彼の。

My face is my fate. と、歌ひし言の葉の。甚麼に愛す可き

論 問 人

程腹藏なき、天真爛熳的の、言ひ現はし方なるかよ。曾て聞く、『婦女の心を得んとする者は、先づ其の容姿を贅せよ』と、また是れ、余と同感の知言と謂つ可き乎。

美人は、進化の原則に規り。醜婦は、野蠻の遺形を存する者也。美人は、天真の麗質を領受して、萬人に愛せられ敬せられ、また寵せらる。醜婦は、其の先天的不運を自覺して、愛の發展を他の法方に探り、終に、精神的貢獻てふ、一の變則なる立脚地を求めり。醜婦の醜は、死に到るまで治する事能はず。美人の美は、粧飾に由りて、二重の光彩を放つ。

醜婦には面を反むけ、美人の艶に向つて襟を正ふし、

論 問 人

彼の微笑を待つもの、豈、余一人のみならんや。著者は、強て求む、著者は天に禱りて冀ひ、著者は神に念じて待つ。彼の Sam Slick の所謂 She is a prime girl, she is, she is A. I. 天上天下最上無上の美しき女の、著者が机邊に座するの時を。著者が理想の女は、如上の如き美人たらざる可からず、然れども著者が趣味の變遷は、審美の點に於て數年前と今日と大に其の趣を異にせり。

「著者は、數年前に於ては、垂髮の夫れを好みたりき、巴理スタイルの細高き踵の編靴を穿てる夫れを好みたりき、夜會の蝦茶式部が著者の理想の佳人たりし也。尠なくとも文金の高嶋田ならずんば、著者一瞥の資格無き者

論 人

たりき。

紅のリボン緑の垂髮を飾り、雪の如き織手和らかにハンドルを握り、スポークの回轉も靜やかに、不忍池畔を逍遙せる夫れが、著者の理想の夫れなりき。白樂天が「長恨歌」に唱ひし、三千の宮女をして顔色無からしめし、其の夫れが理想のそれなりしなり。

さるに、近時の著者が理想の女は、黄楊の櫛卷か、さでは、毛櫛一本の達磨返しの清素なるそれなるなり、しかも、衣紋つくろふて油の香を放つ夫れならで、蛇の目傘の形紺地明諒とせる浴衣肩に掛けて、片足立て、鏡に向ひ、緋縮緬の蹴出ほのく、ほのと芳ばしきやう

論 人

の、それたる也。

人 間 論

鼠小紋春着雛形

大黒屋の場

神田の典吉實は

鼠小僧 治郎吉 尾上菊五郎
傾城 松山 岩井松之助

(菊)愛て様子(子)は聞て居たが深切な親方だ(松)や(前)は與吉さん
いつの間(菊)さつきに(次)の(間)で主人の意見を聞て居た(松)エ
エ夫れ聞かれてか(菊)松山何處へ往くの(だ)松(前)に何も此顔が(菊)

人 間 論

合されぬとは枕探しか(松)夫れと知つては定めし愛想が(菊)何て愛
想が盡るものか、枕探しも言はゞ己ゆへ、素人と違つて其心が
ありやア猶更頼母しい(松)盗みせし身をお前には、頼母しいとは
何いふ譯で(菊)譯といふのは外でもねへ、今朝まで包んで居た者
の、實は己ア盗人だ(松)エ(菊)斯う聞たなら己よりやア松山(主
が愛想が盡きやう(松)ソんなら與吉さん(前)も(菊)サア子供の時か
ら手癖が悪く、人の物は吾物と、盗みはするが今日が日まで、
盗んだ跡は其内の、戸でも下しやア其金へ、利足を附て返す心
夫故町より大名の金を盗むが上分別、何な貧てんやしきでも、
百や二百位ひの金で、家の潰れるとはねいから、鎌倉山の大小
名、和田北條を初めとして、佐々木梶原千葉三浦、當時一郎別
當の、工藤などへは二三度這入り、まぶな時にやア千と二千、
少ねい時でも百や二百、仕事を仕ねいとはなかつた、其替りに

やア貧乏の其名の高い曾我などじゃア、盗んだ金を置いて来た、悪事はするが義理堅へ、言はゞ野暮な盗人だが、知らぬ先きは兎も角も、斯いふ身生を聞ならばお主やア厭になりやア仕ねいか(松)何て厭になりまじやうか、之も皆な其身の好々、お嬢さんと云はれるのが、小さい時から妾しやア嫌い、油で固めた高醫より、潰し島田に結たい願ひ、御殿模様の文字入より二の字續ぎの襦袢が着たく、御新造さんや奥さんと言はれるよりも内の奴家の人かと云れたさに、親をば捨て勘當うけ、お前の女房に成た妾し、何などがあらうとも、何て愛想が盡されうぞいなア(菊)ソソならお主しやア盗人と、知つても矢張り愛想も盡さず(松)お前と一緒に居たいのは、譬へにも云ふ似たもの夫婦(菊)夜盗働らく鬼の女房に(松)枕さがしの鬼神とやら(菊)さういふお主の度胸なら、翌日が日露顯て繩目に逢ひ(松)お上のお仕置き受ればとて(菊)

隙行く駒の二人連れ(松)二本の槍の末かけて(菊)はなれぬ中の紙帳(松)果は野末に(菊)身は捨てられ(松)思へば果敢ない(菊)、(松)身の上じゃなア。

(聲色大全)

やア貧乏の其名の高い曾我などじゃア、盗んだ金を置て来た、悪事はするが義理堅へ、言はゞ野暮な盗人だが、知らぬ先きは兎も角も、斯いふ身生を聞ならばお主やア厭になりやア仕ねいか(松)何で厭になりましやうか、之も皆な其身の好々、お嬢さんと云はれるのが、小さい時から妾しやア嫌い、油で固めた高髷より、潰し島田に結たい願ひ、御殿模様の文字入より二の字續ぎの襦袢が着たく、御新造さんや奥さんと言はれるよりも内の奴家の人かと云れたさに、親をば捨て勘當うけ、お前の女房に成た妾し、何などがあらうとも、何て愛想が盡されうぞいなア(菊)ソソならお主しやア盗人と、知つても矢張り愛想も盡さず(松)お前と一緒に居たいのは、譬へにも云ふ似たもの夫婦(菊)夜盗働らく鬼の女房に(松)枕さがしの鬼神とやら(菊)さういふお主の度胸なら、翌日が日露顯て繩目に逢ひ(松)お上のお仕置き受ればとて(菊)

隙行く駒の二人連れ(松)二本の槍の末かけて(菊)はなれぬ中の紙帳(松)果は野末に(菊)身は捨てられ(松)思へば果敢ない(菊)、(松)身の上じゃなア!

(聲色大々)

論 人

第五章 死

第十一節

『死』は人間の最大趣味

吾人五尺の身、長へに慾望追求の目的を達するに適せず、朝は露に笑ひし牽牛花の、夕に凋萎して色を失ひ、晝は喧噪として鳴きし蟬の、いつしか空殻を枝間に遺すと、吾人夫れ何の異なる處か有る。吾人、不幸にして文字を知り、不幸にして理性を有す。此に於て苦悶遣る處

論 人

を識らず。

吾人夢の中に蠢動し狂奔し、意味なく價值なき夢を繰り返へさんとせり。今の時、若し夫れ、今の時、吾人が呼吸を止め、幽明相ひ別るゝの折、吾人は如何の體度に住す可き乎。再び、無意味に滅し、無價値に了る可き乎。嗚呼、微なる呼吸に活ける吾人の危険、誠に是れに過ぐるもの無し。夢眞迷悟、豈、一大事件に非ずや。天の主は、吾人を救ふと呼び。西方の如來は、吾人を攝取すと號す、地獄を聽き、天國を聞き、靈魂不滅を聽き、而して、吾人は未だ那邊に安住す可きかを知らず。吾人は、此處に慘憺たる苦悶を倍加し來る。

基督は、正義の救済を宣揚して、慰安妙致の指導を垂ると謂ひ。釋迦は、絶世の法門を演説して、安心立命の開導を示すと稱す。吾人は、四福音書を讀み、無量壽經を誦しぬ。然れども、彼等に耳を傾く可く、吾人は、餘りに賢過ぎたりき。そは、彼等に接して、崇高敬虔の情更に起らず、時ならぬ破顔を禁じ得ざりき。難有しと信じ得ずして、面白やと感じたりき。則ち、彼等が、超凡的天才に由つて、大なる空想を、料理鹽梅加減良く、發展したるに過ぎずと觀察諒得せられたりき。空想の成効は賞すべしと雖も、彼等の福音は、吾人を慰めず、彼等の光明は、吾人を照さざりき。但し、又、吾人に、信なく、

吾人に縁の無きにも由れるか。此處に方て、吾人は苦悶の極に達す。あはれ、無意味無價値の今の人間を焼き盡し、垢穢褻の今の人間の根を斷ち切り。而して改めて、清淨圓滿苦悶なき人間を作り得べからざる可き乎。希くば、吾人が住める天地の破裂し破解し。而して新たに、和風順雨、闇曇なき世界を建て得べからざる可き歟。人間の世、始めあり、豈、終りの無からざらんや。必ず、いつかは山も崩れん、海も破れん、文は灰と爲り、人は土と變じ、世は元の渾沌たる大氣と化したせん。百年の形體を持つる者稀なり、縱令、千歳の壽を保つと雖も、吾人、必ず

や、一度びは、死の淵に臨まざる可からず。夫れ、泣いて落ちんか、將た、笑ふて落ちんか。吾人は、其いづれにも安住の準へを缺く、即ち、苦悶する所以也。

吾人は、今日以後、苦悶の人世を解脱し、那邊に安住す可きかの道を求めん。若し夫れ、道を求め得ずして呼吸閉塞せんか、そは、吾人の罪に非ずして、社會無意味の罪に座せん。然は有れど、吾人は、社會無意味の爲の故に、甘んじて、吾人が苦悶を忍ぶ能はず。吾人は、天地の大なるよりも、猶ほ、微なる吾人の一命を重んずる者なれば也。嗚呼、いづれに光明の大道あつて、苦悶せる吾人を救ひ導く可き乎。嗚呼、夫れ、何物の福音あつ

てか、吾人が苦悶の苦を抜き悶を断ち、廓然として清風明月に向はしむる者ぞ。

されどまた静に想へば、『死』はなかなか愉快なるもの如し。巴里の富豪にして大地主たるコンカアモン氏は、或る事情の爲め其の室内に於て木炭を燠らし、自ら室死を遂げたり、然るに彼れの死後に於て、臨檢の警官は氏が其の臨終の感を記したる手帖を發見したる由なり、其の一二を聽くに、十時十五分……死は愉快なるもの如し。十時三十分……卷烟草の火を點じ得たるは眞に幸福なり、其の美味言ふ可からず。十時四十五分……

余は今頸飾を緩む、余の咽喉は恰かも燃ゆるが如し。十
 一時……呼吸困難となれり。十一時三十分……余は
 窒息されつゝあり、將に死せんとす……
 『死』嗚呼、死なる哉。死は吾人の最も愉快に感ぜらる
 る者の如し。『死』は吾人が多大の趣味を想ふ處の者たる也。
 嗚呼、『死』なる哉。吾人は五十乃至七十の春秋を送り、『死』
 によりて煩はしく厭はしき人生を超越脱化する也。無意
 味の人界を遁竄する也。無價値の人間を道逃する也。『死』
 は吾人を感奮せしめ、『死』は吾人を畏怖せしめ、『死』は吾人
 を快活ならしむ。嗚呼、『死』なる哉。
 死人口無く、亡者信を報ずる無し。生死斷末覺の一瞬、

第五章 死 第十一節 『死』は人間の最大趣味

這般如何の妙味の有る可きや、何人も是れを知らんと欲
 して得ざる也。嗚呼、『死』の不思議なるかよ。

第五章 死 第十一節 『死』は人間の最大趣味

第十二節

少年哲學者

少年哲學者藤村操なる者有り、彼は萬有の真相を『不可解』と感じ、煩悶終に死を決したり。而も大なる悲觀となる樂觀との一致せるを知り、死に臨んで胸中何等の不安を認めずして飛瀑の中に投じ、彼れは無量の快感を觀じたる者の如し。

彼れが巖頭を蹴つて、六十餘丈の瀧壺に投ぜし其の勇健の氣性に至つては、天地を震動せしむる底の概無くん

ば有る可からざる也、吾人は先づ、こゝに彼れを歎稱せずんば有る可からず。

況んや、生きて効無く、生きて意味無き人生に在つて、何等オソリチーを認められずと觀じ、生きて無價値ならんよりは、寧ろ悲觀と樂觀との一致を了し得て觀喜したるに於てをや。誰も意味無き生活を繼續せんよりは、寧ろ生活其の者を斷滅せん、此の時に當りて、何人が敢て『生』を以て『死』より優れりと爲すとを得るものぞ。況んや又、著者一流の論理を以てせば、三十年の後に死せんも、三十年を今に縮めて死せんも、何等の遺憾無きに於てをや。若し夫れ藤村操をして、其死を三十年の後に

延ばさしめば、彼は反つてこの大悟の欣抃を感受せざるやも亦量る可からざる也。

希望せざりし『人間界』に産み落されたる吾人は、産み出されたるを怨む、一日茲に在れば一日煩悶有り、人生を去らんと急ぐ者有るも、強ち理無きに非らざる可き乎。

著者は幾度も人生の煩雜殺風景を去らんかと惑ひたりき、何の爲に生れたるや、何を爲す可きや、如何に成る者ぞと、熟考三思、疑問又疑問、煩悶苦悶謂ふ能はず、多少は宗教的感化を受けし身の、厭離穢土、往生淨國の念の絶えざりしが。漸次宗教の誤謬を知り、人生の不眞面目を諒し、俗的娛樂の趣味慾が、不知不識人間的俗化

論 人

せしめ、著者をして卒には『死』を忘れしめたりき。是れ幸か、不幸か、著者今是れをも知らず。

吾人は怪しむ、世人が死に臨みて遺言し、辭世の詞を遺すとを。吾人は一時も早く人生を去らんと希望する者也、片時も迅に人世と關係を斷たんと欲する者也、何の心残り、何の未練の念を存してや、人世に謂ひ残し置くの要有らんや。人世はさほどに眞面目なる者にあらず、今正に幽界に落ちんとして筆舌を動かさんとする、笑ふ可きの極み也。

少年哲學者は何故に、『巖頭之感』を遺せしぞや。彼れは萬有の眞相を『不可解』と信じ、煩悶終に死を決せしに必ず

論 人

や。彼れの死は煩悶の爲めの結果たらざる可からず、煩悶が彼れをして『死』に致さしめしに非ずや。然るに、巖頭に立つに及んで、『胸中何等の不安あるなし』と叫べり、何ぞ其の悟るとの速きや。彼れは、何故に悟りて巖頭を下らざりしや。悲觀と樂觀の一致を知りて、死を急ぎしぞや。吾人は彼れの心事及び行爲に熟考して、多少の疑惑無き能はざる者也。

道路の傳ふる處によれば、彼れが決死の動機は失戀の結果なりとなり。嗚呼、彼れが人生を悲觀したるは、將して失戀の爲の故なりし乎、若しこの風説を眞ならしめば、吾人は彼れを欽歎せざる可からず。彼れは『戀』を捕へんと

したるならん、『戀』を味はんとしたりしならん、あわれやな、彼れは成功し能はざりき。嗚呼彼れは吾人の所謂人間の大目的』に向つて狂奔し、終に事破れぬ、失敗しぬ、茲に於て一路『死』に向つて趨る、是れ人生の大快事也。吾人は風聲鶴唳たらずして、このどの寧ろ眞實ならんことを禱る者也。

病死、老衰、天災の死は、平凡の死にして、吾人の趣味を覺えざる處なれども、自殺及び情死に到つては、吾人の研究す可き大問題たる也。自殺の論は古來泰西學者間に説述せられたれども、要するに倫理的動機論に依り

て説明せらる、吾人は『情死』に附きて、些か思ふ處を述べんと欲す。

男女が戀慕の情嵩じて、俱に死すといふこと、『古事記』に輕太子の悲劇を記載す、佛法渡來前よりの國語なるらし、佛法より傳へたる未來の觀念は愈よこの習慣を鼓舞したる可し、又一方に於いて遊女遊廓制度の膨脹せるはいよく、情死の流行を來す可き動機となりしなり、然れば徳川時代、特に平和文弱に陥りて元祿以後に最も多く起りたるなり。

五右衛門石川が濱の眞砂が盡きぬ如く、世に盜賊の盡きざるとを喝破せし如くに、情死の新聞記事も亦永久に絶

論 人 論

えざる者に似たり。

吾人は『情死』を以て深き趣味有る者と想ふ、吾人不幸にして未だ情死の心的作用を知らざれども、愛する男と戀ふる女とが、眞心と赤心とを合一し、臍と臍とを摺り附けて、心も肉も二體如一身、二心如一心、異體同身となり、双心一神となり、安んじて『死』に處するに至つては、這般絶大無限の趣味無くんば有る可からざる也。

著者が眞摯なる感想の大要は、次の結論に於て稍々明瞭なる可し。

論 人 論

人

小簾の戸
(又越の外)
うき草は、思案の外のさそう水。戀が浮世か、浮世が戀か。ちよいと聴きたい松の風、問へど應も山ほととぎす。月やはものを思はする。癪に嬉しき男の力、じいっと手に手をなんにも謂はず。二人してつる蚊帳のひも。

(糸のまち)

論

人 論

第六章 結論

著者、春秋を送る茲に二十有餘年。過古を回想すれば茫として、夫れ夢の如し。功名の野心に狂ひ、愛慾の心猿を亂しぬ。靜に思念を凝らせば、戰慄として髮爲に立たんとす。現在將た什麼、吾等が現在は、將來に於て、又再び、夢として觀ぜらる可き價值無き現在に非ずや。今の現在は、將來を想望し、未來に期待して、蠢動し狂奔す。吾等の現在の今は、安なく、慰なく、樂なく、快なし。將來の影を夢み、未來の空を夢み、徒らに蠢動

第六章 結論

(101)

人 間 論

し、苦んで狂奔す。而して、其の將來に成さんと欲し、
 未來に得んと求むる處の物は、果して夫れ、何物ぞ。曰
 く、名。曰く、利。唯だ是れ耳。
 吾等が將來に期待し、未來に想望する、大なる期望は、
 吾等が戰慄として、惛然畏懼せし過古の夢と異ならざる
 乎。噫、吾等の期望は、長へに、吾等を惱まし、長へに、
 吾等を悶へしむ。
 さらば、吾等は、什麼の妙術に由つて、この苦痛を脱
 れ得べきぞや。吾等の期望は、夫れ甚麼方面に向つて、
 放たれ得べきぞや。
 人の期望は、人の快樂也。吾等の期望は、吾等の生命

人 間 論

也。生命無くして、誰か活ける者有らん。人にして、誰
 か快樂を欲せざる者無からんや。吾等の生命は、即ち夫
 れ、快樂也。吾等は、吾等の快樂を現在に樂しむとを知
 らず、遠き將來に期待して、現在を徒らに空しく消しつ
 つあらざる無き乎。

Mackay に聽け、 Very few men properly speaking live at present,
 but are providing to live another time.

實にや、吾等は死に臨むまで、期望を追ふて蠢動し、
 快樂を逐ふて狂奔し、現在の今を、準備にのみ費さる。

カール僧正の曰く、『人は常に今日を最後の日と思ひて
 生活せよ。』と、吾等は今の一刻時に意味有あらんとを冀

ひ、今の一瞬間に價值有らんと欲す。
 大命將に終らんとする時、吾等は一代の夢を回顧し、
 吾等は、過去の夢を想見し、悔懼交々洶沸するの折、苦
 悶轉々、且は窘し、且は阨し、號泣天に向つて絶叫すと
 も、時や既に晚からん。
 吾等は、徒らに空しく、快樂追求の準備に悠々たる可
 からず。吾等の快樂は將來に有るに非ず、吾等が期望は
 未來に待つ可からず。淨土遠きに非ず、天國今茲に在り。
 吾等の壽は天にして保ち艱し、この時に悟らざるば、大
 なる悔を貽すことあらん。眞箇、心氣一轉、豈、今の時
 に非ず哉。

人間論終

迷故三界城
 悟故十方空
 本來無東西
 何處有南北

(金剛經)

文學士 大町桂月先生著

筆の志づく

好評三版全一冊 定價四十錢 (郵税八錢)

桂月先生の才筆當代に超絶せることは今更説くを要せざる所、加ふるに才情人を刺し才思涌くが如し、綿心繡腸發して流麗なる美文となり、痛快なる論文となり、紀行となり、史傳となり、隨筆となり、韻文となる。先生が『筆の志づく』は、やがて文壇の花也珍也。世間讀書の味を解したまふの士座右に一本を備へたまへ。

世評 一斑

●二六新報評して曰く

楞牛遊いて後、評論界の明星として文壇に重きを爲せる、大町桂月氏の論稿文藻を集め、名けて『筆の志づく』と云ふ、議論あり、批評あり、紀行あり、史傳あり、桂月の長所載せて漏さず、綠陰の邊閑窓の下、巻を措くに忍びざらしむ、表装の麗、印刷の美は、文祿堂獨得の業、くだくしく贊するまでもなし。云々

●帝都書籍新報評して曰く

著者の位置及び人格等は世既に定評あるが故に茲に贅せず、本書の如きは既往二十餘年間に於ける作品。其の散文なると、論文なると、韻文なると、將た又た新詩なるとを擇ばず、五十有三章の多篇を輯録されたるものにて、而かも其多年間に成れるもの、内より精と粹とを抜き擇びたるものなれば、意氣甚だ豪宕にして文章の雄健なる著者が精の凝つて句となり章と成れる、何れか金玉の價なからんや、而して开が中に、批評家となりて快活痛切なる評言を下したるものは「迦具土を讀む」みだれ髪を讀む」批評一束」等なりとす、又史索家としては「藤原時平」「足利尊氏」を解剖的に紹介し、次いで「古城談」の如きも斯道研究者の尤も喜ぶ所なるべし、又「臨風を送る」「乙羽を吊ぶ」等は先づ第一に自己の安心を示して而して友情の温かなる事を言外に言はしめて餘りあり、其他新詩にも讀むものなしとせず、假に一篇を抄録せば、峠の茶屋と云ふ題に

今日も休もか峠の茶屋で。 茶屋にて冷たい水が涌く。

風が冷しい。娘がござる。 娘十七、名はお花。

にツと笑ふて、愛想を添へて。 賣るも可愛や、力餅。

杯あり、敢て鉢裁ブラマ所が如何にも桂月氏的に面白からずや、終りに「楞牛の一生」と云ふ吊文あり、楞牛を評すべく遺憾なく、楞牛を吊ぶべく情長頗る切なり、此の一篇を讀むもの徐ろ涙を禁じ難からん、菊判二百冊餘頁悉く玉の全きものと思はゞ亦珍らしからずとせんや、装釘は殊更に飾り立てぬ丈けに例よりは高尚に見え、表題の短冊に擬したる杯の思ひ付きも文祿堂の特色なるべく、今の文壇を語らんとする人は必ず讀まるべきなり。

文學士 大町桂月先生著

筆の志づく

好評三版全一冊 定價四十錢 (郵税八錢)

桂月先生の才筆當代に超絶せることは今更説くを要せざる所、加ふるに才情人を刺し才思涌くが如し、綿心繡腸發して流麗なる美文となり、痛快なる論文となり、紀行となり、史傳となり、隨筆となり。韻文となる。先生が『筆の志づく』は、やがて文壇の花也珍也。世間讀書の味を解したまふの士座右に一本を備へたまへ。

世評一斑

●二六新報評して曰く
楞牛遊いて後、評論界の明星として文壇に重きを爲せる、大町桂月氏の論稿文藻を集め、名けて『筆の志づく』と云ふ、議論あり、批評あり、紀行あり、史傳あり、桂月の長所載せて漏さず、綠陰の邊閑窓の下、巻を措くに忍びざらしむ、表装の麗、印刷の美は、文祿堂獨得の業、くだくしく贅するまでもなし。云々

●帝都書籍新報評して曰く
著者の位置及び人格等は世既に定評あるが故に茲に贅せず、本書の如きは既往二十餘年間に於ける作品。其の散文なると、論文なると、韻文なると、將た又た新詩なるとを擇ばず、五十有三章の多篇を輯録されたるものにて、而かも其多年間に成れるもの、内より精と粹とを抜き擇びたるものなれば、意氣甚だ豪宕にして文章の雄健なる著者が精の凝つて句となり章と成れる、何れか金玉の價なからんや、而して开が中に、批評家となりて快活痛切なる評言を下したるものは「迦具土を讀む」みだれ髪を讀む」批評一束」等なりとす、又史索家としては「藤原時平」「足利尊氏」を解剖的に紹介し、次いで「古城談」の如きも斯道研究者の尤も喜ぶ所なるべし、又「臨風を送る」「乙羽を吊ふ」等は先づ第一に自己の安心を示して而して友情の温かなる事を言外に言はしめて餘りあり、其他新詩にも讀むものなしとせず、假に一篇を抄録せば、峠の茶屋と云ふ題に

今日も休もか峠の茶屋で。

茶屋にて冷たい水が涌く。

風が冷しい。娘がござる。

娘十七、名はお花。

にツと笑ふて、愛想を添へて。

賣るも可愛や、力餅。

杯あり、敢て林裁ブラマ所が如何にも桂月氏的に面白からずや、終りに「楞牛の一生」と云ふ吊文あり、楞牛を評すべく遺憾なく、楞牛を吊ふべく情良頗る切なり、此の一篇を讀むもの、徐ろ涙を禁じ難からん、菊判二百冊餘頁悉く玉の全きものと思はゞ亦珍らしからずとせんや、裝釘は殊更に飾り立てぬ丈けに例よりは高尚に見え、表題の短冊に擬したる杯の思ひ付きも文祿堂の特色なるべく、今の文壇を語らんとする人は必ず讀まるべきなり。

文學士 大町桂月先生著

社會訓 近刊

社會に木鐸なかるべからず、指導者なかるべからず、桂月先生は能文の士也、其專攻する所は文學、殊に國文學にあれども社會の各方面に趣味を有し、奇警なる炯眼よく社會の弊害を洞察し人情の弱點を看破し加ふるに筆鋒銳利才情躍動す。文藝、教育、宗教、道德、風俗、習慣等社會一般に關し例の得意の才筆を揮ひて趣味津々たり、讀んで樂むに足り且つ戒むるに足る、社會改良の聲高き今日一本を備へて愛誦し給はざるべけんや。

訂正 再版
CHERRY BLOSSOMS
WEDDED TO ROSES

和英對照 **さくらとばら** 定價卅五錢 郵稅四錢
日本歷史
中外英字新聞評して曰く、本書は國史中最も著明なる出来事なを識に高等商業學校、錦城學校等に於て英語を教へたる經驗に富み、殊に英文を最も得意とする永井尚行氏の英譯またるものなれば、外國人をして大和魂の香ばしきを仰がしむるに於て其功鮮なからざるべし。云々
東京日本橋東中通 文祿堂書店 寶樹全國書林

新燈

滿天下の 才人淑女が待
ち待たたまへる 江見水
陸君 田山花袋君 其他諸
名家の筆に成る 小説『新
燈』はいくく今般美
装を凝らして 江湖に見ゆ
る事とはなれり
依て 新婚の若夫婦は勿論
伉儷の約をむすびて 人生
の最大幸福を 夢みつゝあ
るか 或ひは 百花をあら
ふ 胡蝶の如き あはれ面
白の 御力懐は くれぐれ
も 讀ませたまへ
めてたく
定價金三十八錢 郵稅
六錢
東京市日本橋東中通り
文祿堂書店

秋 薩 道 人 合 輯 定價三十錢 (郵稅四錢)
● サラモ、腹一ぱいの熱を吹きたる、春蘭、秋菊といふこの奴、あて玉ふも一興かや
● 東京市日本橋區東中通り 文祿堂發行

STRANGERS IN STRANGE LANDS.
洋行 赤毛布 定價二十錢
奇談 赤毛布 定價三十錢
長田秋濤君著
新赤毛布 定價廿五錢 (各郵稅四錢)
田舎漢の江戸見物な 人稱名して赤毛布といふ、本書は當代の貴顯紳士が、不知案内の海外に航して頻次、喜多然たる滑稽を演ぜし奇談を蒐集せしものにして、政治家あり、軍人あり、醫師あり、文士あり、豪農あり、歌人あり、一體萬笑、魂天外に飛びたまふべし。
花本志庵先生著
● 當世ハイカラ氣質 定價廿五錢 (郵稅四錢)
本書は今や世に時めける、ハイカラ議員、ハイカラ紳士、ハイカラ學生を、鋭鋒當るべからざる、しかも滑稽酒脱の妙筆もて、或は冷評し、或は痛罵し、或は醜弄せる、奇々、珍々、妙々、不思議、實に一種の怪文字なり。



紅葉涼葉
春風葉
鏡花合著
東京市日本橋區東中通り
文祿堂書店

再版 出來

正價六拾錢 (郵稅共)

尾崎紅葉先生著
武内桂月君畫
齋藤松洲君畫
小説 芝肴
定價郵稅共五拾錢



世の部に色深く、五人揃ひて生粋の神田育ち。
酒き雪間に若葉を摘むが如き風情は東京よ、紅梅のなまめくをお大にたふべくば、お灘は寒牡丹のおこれるにさも似たり、水仙の憐れなるがお違ならば、さては福壽草のあどなきはお様の上の、いづれをいづれ、香をきそよ、美しくの娘がた。

巖谷小波君序
山岸荷葉君著
清水清方君畫
島居清忠君畫
大村令邦君畫
古今無類の美本
三版出來
定價三十五錢 (郵稅四錢)

坪内逍遙先生序
森鷗外先生序
伊原青々園君著
市川團十郎
定價郵稅共九拾錢

増補 福引千題
定價二十錢 (郵稅四錢)
笑ふ門には「福引」千題の巻中には、宗教、天文、人事、支體、理財、教育、文藝、武藝、歴史、動物、植物、食品、器具、談曲、演藝、遊樂、地理、等、の十七門に分けてある、古今無類の珍本であります。
東京市日本橋區東中通り 文祿堂發行 全圖書林
電話本局 八十八番

尾崎紅葉先生著

武内桂月君畫
齋藤松洲君畫

小説 芝肴

定價郵税共五拾錢

坪内逍遙先生序
森鷗外先生序
伊原青々園君著

市川團十郎

定價郵税共九拾錢

巖谷小波君序
山岸荷葉君著
錦木清方君畫
鳥居清忠君畫
大村令邦君畫

古今無類の美本
三版出来
定價三十五錢



世の部に色深く、五人揃ひて生輝の神田賣ち。
酒き雪間に若菜を揃むが如き風情は、お京よ、紅梅のな
まめくをお大にたふべくば、お灘は寒牡丹のおこ
るにさも似たり、水仙の機ねなるがお違ならば、さて
は福壽草のあどなきはお様の上の、いづれをいづれ、
香をきそよ、美しくの娘がた。



笑ふ門には「福引千題」の巻中には、宗教、天文、
人事、支體、理財、教育、文、武、地理、歴史、動物、
植物、食品、器具、謡曲、演藝、遊興、等、の十
七門に分けてある、古今無類の珍本であります。
東京市日本橋區東中通、文祿堂發行、うりさばき
電話本局、八十八番

人間論 高才辨

竹林山人

余が父兄の、支那の論語に學びし如く、余は、イングリッシュより得る
處淺からざりき、乃ち記憶に存する三四を抜き、高才辨とは名づく。論語
の説、味ふ可きもの有らん、されど、高才辨中エキストラクツの意味する處、
また優に彼れに勝れるもの無しとせず。余、由來邦人の思想の輕きに過ぎ、
頑に傾き、近き者には特に厚く、知らざる者には甚だ冷淡なる环、あきた
らざる節々を嘆くや久し、終には其の先入となれる支那道德の偏狹を惡む
可く止を得ざるに到れり。然れども、物極まれば變ず、永く邦家の道德を
支配せし孔孟教も、浪然として今や地を拂はんとす。此に於て、私徳公德
缺點無く、頑固因循の卑屈を排去し、進趣活潑の氣風を鼓吹し、不正醜行

の陋習を掃除し、正義博愛の公道を發揚し、こゝに情理圓滿の理想的道德の建設せらる可き動機を作らざる可からずと信じ、この辨を記す者也。

Socrates は言へり “Let him that would move the world move first himself.” と、主義を抱懐する政治家よ、不平に吟嘯せる策士等よ、世を動かし、人を動かさんと欲せば、夫れ先づ自ら立て、而して後、人を動かし、世をも動かし得ん。人心の墮落を見て、嘆息する宗教家よ、餘りに其の聲を高からしむるとを止めよ、罪惡の繁き社會を見て、絶叫せる倫理學者よ、餘りに其の聲を大ならしむるとを止めよ。君等の倫理を論じ、宗教を説く、全く徒勞たる無きか、論ずる君等は誠に其の實を有する處なるか、説ける君等は眞に空しきと無きか。酒を酌みつゝ、禁酒を説くとの、餘りに予盾には非ざる無きか、彈丸を込めざる發砲は聲のみにして、何物をも得的つる能はざる可し。倫理學者よ、先づ實を取り來つて汝が空しきを満たし、而して後に

汝が得たる本領を論ぜよ、宗教家よ、須らく汝が言語に換ふるに實行を以てし、然る後、汝が信ずる信念を説け。然らずんば、本領無きペンによりて論ぜられ、實行無き舌によりて説かるとも、世は顧みざる可く、人は耳を假ちたるべし。 Mackay より聽く How is it possible to expect that mankind will take advice, when they will not so much as take warning?

吾等が呼吸する間だ、最も永く、最も弘く、實行せざる可らざる者は禮義也。禮義は、吾等の活ける間だ、一刻も忘る可らざる最も貴重なる條件となす。世人は、禮義を以て煩はしき難事として、殆んど無用の如く思へど、試みに聽け。 Montague 曰く “Civility,” “costs nothing and buys every thing.” 一文の資本をも要せずに、多くの利徳を得る物は禮義に非ずや。又、 Mackay に聽く A good word is an easy obligation; but not to speak ill requires only our silence, which costs us nothing. 人を譽め人を良きやうに謂はんは、何人にも容易く出

來得らる可し、されど、人をくさし人を悪しく謂はぬとは、猶ほ一層の容易なる也、そは、只沈黙の儘にて、しかもまた、何等の資力も勞力をも用せざればなり。寔に趣き有る言の葉ならずや。

Mackay に又聽く、A man's own good breeding is the best security against other people's ill manners. 此方が禮義を以てすれば、他人の無禮を禦ぐに最も宜しと、味有る哉。

又、Smiles 曰く、The cheapest of all things is kindness, its exercise requiring the least possible trouble and self-sacrifice. 世の中に於きて最も容易なるものは、親切なり。親切を行ふには、能ふ丈け僅の面倒と克己とを要す、殆んど面倒も克己も須ひざる底也。世の禮義を蔑し、親切を知らざる人は、熟讀して可也。

吾等は、兩手に花の快樂を貪り得べからざるなり。右には櫻、左には梅、こは不可能事にして、天の許さざる處たり。家の妻に子を産ませ、外には

妾を弄ぶ、こは道に反く者たる也。 Dixon 教へて曰く、 You can't both have your cake and eat it.

吾等は常に、世の人の多くが、再び若がへらんとを欲して叫ぶを聴く。こは、同情を表して佳なる可きか、吾等も共に與す可きか、あらず、同情を表する不佳、與する甚だ不可也。彼等は平凡なる輩なればなり、彼等が願ふ如く、彼等をして再び若きに返さしめよ、而して彼等は彼等の叫びをも亦再びするならん。三たび其の生活を繰り返へし、四度び五たび繰り返へして、而して年老ゆれば、嘆聲は三たび繰り返へされ、四度び五たび復繰り返へされん。そは、平凡なる人の發する叫びなればなり。

Mackay より聽く、No wise man ever wished to be younger. 賢者にして未だ曾て若返へる可く願ひし者無し、實に至言と謂ふ可し、折角に修得せる處を無に歸して、再び繰り返すの無用なれば也。吾等、豈、鑑みざる可けんや。

吾等は、單獨にして一日も生活し得らる可きには非ず。必ずや群を成して、其の天賦を全ふするもの也。近比、博愛主義を喧傳し、社會主義を鼓吹す、理大に存す、勿論のと謂ふ可し。吾等の中には、富んで自由なる者あり、貧して不自由なる者あり、されば自由の富者は不自由の貧者を助く可き義務を帯ぶると、常識の首肯する處たる也。自由に餘りある富者は、常に其の位置を換へて、汝が境遇を省察することを忘る可からず。この理は富者と貧者とのみ限るにあらず、多くの場合に、吾等は此の義務を盡さん也。Mackay 曰く、*The more we help others to bear their burdens, the lighter our own will be.* 嗚呼、吾等は、吾等の能ふ助け、夫れ助け、惱める者を救ひ、困しむ者を助け。吾等の能ひし助け、夫れ助け、吾等自らの重擔を軽減せしをよろこばん。

吾等の理智を進歩せしめ、吾等が修養を積まんには、先づ書籍に由らば

る可からず。現下出版の業明けて、新著新刊頻々として出て、所謂、肝牛充棟も嘗ならざるの概有りと雖も、眞箇、吾等が理智を進歩せしめ、吾等の修養を積まんには、眞摯の指導を垂る、書籍は甚だ稀にして、且得難きやう思はる、これは皆人の経験する處ならん、宜なる哉、次の言に聽け、Fuller 曰く、*Learning hath gained most by those books by which the printers have lost.* 吾等の謂はんと欲する處を既に能く道破せり。

吾等は、日本人の經濟的知識の幼稚なるを思ふる者也。支出と收入との打算的頭腦を缺きて、借金するとの一の習慣性を子孫に傳播するを思ふる者也。貯蓄の觀念乏しくして、不規律の生活を敢て演じ、以て偶然の僥倖を空望する者あるを思ふる者也。試みに歩を地方に移し見よ、貯蓄の觀念乏しき我等は、頼母子講杯いへる不完全なる約束によりて、稍々額多く集りたるを得んとを期せり。是れ偏に、彼等が日々の儉約的習慣の缺如

せると、日々の貯蓄的習慣の養成せられざるとに歸因せずんばある可からず。又都會人士を見よ、彼等は時としては、其の外形を飾る可く、其の舌を樂します可く、又は、世を嘯す可く、人に街ふ可く、不相應なる贅澤を爲し、而して彼等の金庫はマイナスを生ぜり。此に於て、身を毒し、世を害す、滔々皆然らざるは無し。彼も是も、慎む可からずとせんや。

Mackay に聽く、*Economy is no disgrace; it is better living on a little than out-living a great deal.* 儉約は美德なり、大山的借金して贅澤せんよりは、吾等はさやかなる家庭に於て、平和に楽しく活さん。

吾少き時、モラル讀本を讀み、次の語を記憶す。

Live upon sixpence a day, and earn it. 吾等の住ひし、吾等の纏ひし、吾等の喰ひ且つ飲む、全ての費へは、吾等是れを儲けざる可からず。勉めなば、天は必ず吾等を利せん。

Richarlson 曰く、*I ever made shift to avoid anticipations; I never would eat the calf*

in the cow's belly. 未だ己が金庫に金の収まらざるに、既に収まりしとして、使ふ如きは不可也。儲けざる前に、儲けし心持ちと成るは、人の常なり。入らざるに、入りしとして費さば、危険を招かん。

又思へ、*Smiles* 言はずや

The proverb says that "an empty bag can not stand upright;" neither can a man who is in debt.

空囊は直立せず、と、千古の明言に非ずや。借金持ちも頭揚らず、と、古今の金言に非ずや。藝も無く、能も無き人は、空の囊に例へつ可し、そは、獨立獨歩、世に立ち難く、彼の頭は、常に下に向つて垂たれん。世の人よ、汝等は汝等の頭を垂たる可く好むか、高く汝等の頭を揚げて、獨立活歩す可く望まざるか、想へ汝等、汝等の頭には貴き光と貴き力との宿れるに非ずや。汝等の頭は、神に捧ぐ、貴き光と貴き力との宿れる汝等の頭は、天に捧げられしには非ざるか。汝等思へ、汝等の頭は、位の有る人の前に、

高橋五郎先生新著

人生觀

菊大判二百頁餘
洋裝頗高尙優美
定價金五十錢
郵稅八錢

醉生夢死、飢ては食ひ、飽きては寐、寒くては着、暑くては脱ぐ、唯是のみならば、禽獸と何ぞ擇ばんや、苟くも人たれば、假にも萬物の靈と稱する人たれば、少なくとも如何んか是れ人生、人生とは何物ぞや位ゐの疑問は之を蓄へざる可らず、寔に人は目を醒すや此の疑問なきを得ず、さればこそ藤村操は華嚴の瀑に投身したれ、村岡美麻は牛込の古池に溺死したれ、實に人生觀は然か大切なると同時に又極めて健全なる者ならざる可らず、此書は即ち下等動物界より人間界を通觀し、大概括を此間に施し、遂に至健全なる安心立命的な人生觀を打出し來れる者なり、苟くも人間の人間たるべき本分を知らんと欲する者は一讀せしむば有る可らず、ラセラス、カンチード、フアウスト、ハルトマン、加藤弘之、ビヒチル、ミル、スペンサル、ロチエ等の人生觀悉く此中に評隲せらる、何等の濶大、何等の偉觀、

發兌元

東京市日本橋區富屋町十六番地

前川文榮閣

(一)

3/38

金を持てる人の前に、下げらるゝ頭に非らざるとを。想へ汝等、汝等の頭は黄金の前に、權勢の前に、垂たる可き頭には非ざるとを。汝等夫れ勵め而して汝の藝能を研け。汝等夫れ勉め、而して汝の黄金を積み、さらば、汝は樂しき人生の味を知り得ん。

Mackay 聽くに、The power of fortune is confessed only by the miserable, for the happy impute all their success to prudence and merit. 吾等は不幸に偶へば、天命なりと謂ふ。吾等は吾等が幸福なる時は、吾等の用心と價値とに由りて成功せりと云ふ。不幸の人は天命を談り、幸福の人は、其の成功を、自己に歸す。不幸の人は、天を恨み、幸福の人は、天を忘る。吾等は不幸の時にのみ天を思ひ、吾等は、成功の時に天の恩を謂ふ能はざるか。嗚呼、吾等は如何に夫れ勝手氣儘の動物なるかよ。

高才書

高橋五郎先生新著

人生觀

醉生夢死、飢ては食ひ、飽きては寐、寒くては着、暑くては脱ぐ、唯是のみならば、禽獸と何ぞ擇ばんや、苟くも人たれば、假にも萬物の靈と稱する人たれば、少なくとも如何んか是れ人生、人生とは何物ぞや位ゐの疑問は之を蓄へざる可らず、寔に人は目を醒すや此の疑問なきを得ず、さればこそ藤村操は華嚴の瀑に投身したれ、村岡美麻は牛込の古池に溺死したれ、實に人生觀は然か大切なると同時に又極めて健全なる者ならざる可らず、此書は即ち下等動物界より人間界を通觀し、大概括を此間に施し、遂に至健全なる安心立命の人生觀を打出し來れる者なり、苟くも人間の人間たるべき本分を知らんと欲する者は一讀せしんば有る可らず、ラセラス、カンテード、フアウスト、ハルトマン、加藤弘之、ビヒチル、ミル、スペンサル、ロチエ等の人生觀悉く此中に評騰せらる、何等の濶大、何等の偉觀、

發兌元

東京市日本橋區館屋町十六番地

前川文榮閣

(一)

3/38

金を持てる人の前に、下げらるゝ頭に非らざるとを。想へ汝等、汝等の頭は黄金の前に、權勢の前に、垂たる可き頭には非ざるとを。汝等夫れ勵め而して汝の藝能を研げ。汝等夫れ勉め、而して汝の黄金を積み、さらば、汝は樂しき人生の味を知り得ん。

MacKay 聴く。The power of fortune is confused only by the miserable, for the happy impute all their success to prudence and merit. 吾等は不幸に偶へば、天命なりと謂ふ。吾等は吾等が幸福なる時は、吾等の用心と價值とに由りて成功せりと云ふ。不幸の人は天命を談り、幸福の人は、其の成功を、自己に歸す。不幸の人は、天を恨み、幸福の人は、天を忘る。吾等は不幸の時にのみ天を思ひ、吾等は、成功の時に天の恩を謂ふ能はざるか。嗚呼、吾等是如何に夫れ勝手氣儘の動物なるかよ。

高才閣

高橋五郎先生著

訂正再版

世界三聖論

菊大判 凡二百頁
印刷鮮明紙質特選
定價 金四拾錢
郵税 金六錢

三聖とは何ぞや、即ち東洋に大關係ある孔子釋迦基督なり、東洋の宗教及び道徳は今や此等三聖の手中に在り(第一章)三聖の關係(第二章)三聖の人物(第三章)三聖の感化力等の如何を知るは將來の道徳及び宗教を推斷するに最も緊切なる者とす、高橋五郎先生其富騰の知識と其犀利の筆鋒を以て縱横に之を論評せらる。壯快の文字深遠の思想三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむ、何れの倫理か今後人心を規正すべき、何れの宗教か將來天下を支配すべき、此大問題に解決を與ふる者は確かに此書なるべし

哲學博士リー君原著
高橋五郎先生譯

訂正五版

人生哲學

菊大判 二百四十頁
印刷鮮明紙質特選
定價 金五拾錢
郵税 金八錢

本書の原書は天下の諸新聞雜誌口を極めて之を賞揚讚歎し、萬國の學者一齊に之を以て近世の一大奇書と爲す、其今日の世界に有用適切なる者たるに非ずんば馬ぞ是の如くならんや、原書の文章に至りては實に光焰萬丈にして目ために眩まんとす、其議論に至りては蘇國の博士「スタルリング」が評せし如く「哲學上科學上文學上の博識多識より五綏燦爛たる虹蜺を紙上に現出出来る」と謂つべく眞に是れ「アトラクタ、コンスタ、チウシヨン」が評せし如く「超群絶倫の綜合的人生哲學にして、學問と宗教此書に於て始めて琴瑟の和諧に達せり」と云ふべし、其説く所は深遠なれども一般の讀者も亦讀て容易に解するを得ん、是れ著者の靈腕と譯者の精苦とを待て始めて成就せる大功業なり、大方の君子愛讀を給へ

正岡藝陽君新著

最新刊

新時代の道徳

洋裝 無類美本
定價 金廿五錢
郵税 金六錢

久しく文壇に消息を絶ちし正岡藝陽氏、今や再び其椽大の筆を揮て文界の中堅を突かんとす、新時代の道徳一篇實に其宣戰布告也、氏の筆力世已に定評あり、然れども此篇の如く大膽にして思想の斬新なるもの氏に於て未曾有なると共に、又實に文壇の珍とすべきもの也、世評一斑
此書は著者の道徳觀を有體に忌憚なく告白せしもの、即ち復讐主義を鼓吹し、偽愛國者を嘲り、蠻力の前には正義なく人道なしと喝破し、愛に到底虚偽なりと斷じ、人生須く其欲する處の慾を逞ふるにありと説く、古今の英雄滔々皆之れ大なる悪人なり彼等より惡を除けば彼等に稱すべく敬すべきなし、精神の自由之れ何物を得るよりも難し、弱肉強食は寧ろ生物自然の原理なるを以て人亦宜しく強者となり弱者の肉を食ふべしと結論す、此書恐くは「イチエ、ゴルキ」邊より胚胎し來れるならんか、藝陽獨特の犀利の筆鋒肉を刺して骨に到るの概あり、此書の發行今少しく早かりせば彼の藤村操をして華嚴瀑下に泡沫たらしめずして止みたるならん
(横濱貿易新聞評)

久津見蕨村先生著

訂正五版

家庭子供のしつけ

洋裝 清酒器麗
定價 金貳拾五錢
郵税 金四錢

家庭教育不完全の聲漸く喧し、世上是か適切なる參考書を要求すること頗る急にして、其之を缺けるが爲めに、子女教育上大なる不便を感じつゝあるは、識者の常に遺憾となせる處なり
本書は是が缺點を補はんが爲め著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚時代、兒童時代、少年時代、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方を言文一致體にて十章百六十餘條に説き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ、直に實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著なり

書簡文の法式男女に別れて大成せるものは、古來未だ嘗て有らず、蓋し書簡に法式のなからざるべからざるは、向人に贈答の缺くべからざるか、如く、荷も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖、寄人中郵秋香先生深くこゝに感ぜられ、即ち男女に就きて、各書簡文法式の撰者ありて之を世に公せらるる。

新編書簡文法式

總テロス金字入
美裝西洋綴全一冊
定價 金五十錢
郵税 金六錢

（本書目次）總論、書簡の書簡箋、封筒、結文、折状、包狀、包封、年月日、横頭、平出、宛字、自他名稱、冒頭、字、墨色、印章、付置、付書、端書、通書、頭字、送り假字、假字遣、收結詞、書簡語、君、贈、の詞、調、調用、調法、調字、調類、名宛小札、口上書、懷紙、書簡語、附録、一種の調法、調用、調法等の如きは常人の心付かざる點少なからず、本書の價值はこれのみにて充分に存する也。

新編女子書簡文法式

總テロス金字入
美裝西洋綴全一冊
定價 金六十錢
郵税 金六錢

（本書目次）總論、書簡の書簡箋、封筒、結文、放らし文、包狀、包封、年月日、横頭、平出、宛字、自他名稱、冒頭、字、墨色、印章、付置、付書、端書、通書、頭字、送り假字、假字遣、收結詞、書簡語、君、贈、の詞、調、調用、調法、調字、調類、名宛小札、口上書、懷紙、書簡語、附録、一種の調法、調用、調法等の如きは常人の心付かざる點少なからず、本書の價值はこれのみにて充分に存する也。

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生著
華族女學校講師 小野鷺堂先生書

新編書簡文例

（男）半紙摺和裝美本
全一冊定價六拾錢
（用）郵税六錢

新編女子書簡文例

（女）半紙摺和裝美本
全一冊定價六拾錢
（用）郵税六錢

書簡の文牒は直に其人の品位如何を想像するに足るべく、又其人の智識の多少を推測し得べきものなり、故に書簡の文牒の荷もすべからざるは、今更に喋々を要せず、本書の文例は現代の文豪中郵秋香先生の筆墨より進出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陥らず流俗に同せずして、眞に今日書簡文の好摸範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鷺堂先生の手腕に成りしものなれば、又習字の鑑として上乗の書なり、特に上欄に類語數千句を掲げ、書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきものなり。

發行所

前川文榮閣
日本橋區筋屋町十六番地

81
933

81

3



008041-000-4

81-933

人間論

湯朝 觀明/著

M36

AAA-0273



